N氏

誇大紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎ氏

【Ｎコード】
Ｎ３８４５Ｍ

【作者名】
誇大紫

【あらすじ】
思い出話をしよう。お亡くなりになった私の友人Ｎ氏は霊媒体質であった。そして私は大の怪談好きであった。大学生二人が織り成す「怖さ」を巡る愉快な騒動集。
時々思い出したように更新されます。

或る日のこと

夕暮れ、晴れているのに雨がぱらぱら降っていた。

帰り道を早足で歩いていると、目の前でＯＬ風の女が倒れたそうだ。口の端から泡を吐いているが誰も見向きもしない。不愉快な気分でＮ氏はその女の手をとり肩を揺すった。明るい色の髪が滑らかに揺れ、Ｎ氏の手にさらりと触れた。

女は気を取り戻したが、動くことができないので家まで連れていってくれと頼んだ。彼は渋々了解し、彼女の下宿まで負ぶってやった。

部屋には食べたばかりのカップ麺や缶ビールが散乱していた。湿った万年床に彼女を寝かせる。スーツの上着をハンガーに掛け、水を飲ませてやった。

するとその女はＮ氏に抱きつき、どこへも行くなと泣くのである。切れ長の目から流れる涙。何があったかは知らないが、しばしそうしているとまた眠りに落ちた。安らぎを絵にかけばこうであろう、という顔だったらしい。

仕方なく部屋を片付け飯を炊くと、棚の上にお稲荷様を奉っているのがわかった。もしやと思い、眉に唾をつけるとそこは雑草が腰まで伸びた空き地であった。

Ｎ氏はすがりつく女を引きはがし、走って逃げた。女は淋しくてやっただけだと言い続ける。

彼は息も切れ切れになりながら駅までやってきた。そこへたまたま出くわした私は、買物袋から油揚げを引っ張り出して交差点に蒔いた。

Ｎ氏の後ろから走ってきた女は油揚げを追いかけ、トラックに轢かれてあえなく死んでしまった。

そこに残った大きな狐の死骸を車たちが避けていった。

私は彼を助けたのである。だからＮ氏が妙に落ち込んだ顔をした

のも私のせいではないし、彼が少しだけ怒っているのも筋違いである。

私は悪いことはしていない。絶滅したと思われていた名呑町最後の狐だったと言われようと動じはしない。

それでもN氏についていって穴を掘って埋めるのだけは手伝った。妙な天気に気分がおかしくなったのだ。

毛のない猫騒動

先日謎の死を遂げお亡くなりになったN氏が生前に舌を噛みつつ血ヘド混じりによく言っていたのは「怖いと思えば何だって怖い」という箴言である。

怪談集めを趣味とする、古今東西どこを探してもゴロゴロしている平々凡々な脇道の逸れ方をした大学生の私は、ある日、N氏のアパートにルンララルンと遊びに行った。

彼はいわゆる「敏感な人」であり、何かにつけ見てしまったり呪われたりするので部屋に引きこもってシミュレーションゲーム――このジャンルは意味が広すぎるけれども彼の名誉にかけて言えばガテン系の女性しか登場しないマニアックなエロゲなどでは決してなく戦略シミュレーションRPG――ばかりしていたようである。

私は彼がランチを喰らう昼過ぎを虎視眈々と狙って訪ね、インターホンを押して待つ。ドア越しにスパイシーなカレーの匂いがして胃袋はサア今カ今カとフライング気味に口許まで上がってきていたというのは言い過ぎだ。

「おー、何だ？」

ドアを開けて出てきたのは、夏だというのに色が白い死人めいた男だった。今まさに墓場から掘り返されとれとれフレッシュ直送便でやってきたことが私にはわかる。

「こいつ、腐ってやがる……」と呟きかけて彼がどう思うか考えてやめる程度の分別くらい、私は持っているので無問題（懐かしい！）である。

「や、ちょっと寄っただけ」

怪談がどうのという話を出せば警戒されるので、しばし邪魔させてもらうといった調子でぬらりひょんの如く部屋に上がった。

「いただきます」

よく煮込まれたチキンカレーを食べる。横に蓮根の福神漬を添え

ていないのが彼らしい残念さといったところだが、そのような瑣末な事象を気にするほど私はコドモではない。
「福神漬は？」
念のため聞いてみた。
「ねえよ馬鹿」
ならば仕方あるまい。私は山より低く海より高い気持ちで許してやり、心に深くダイブしてそこに「ね・え・よ・馬・鹿」と刻み込んだ。
さりげなく不思議な話→怖い話へと流れを持っていく。
「駅前でバス待ってたら、犬を散歩させてる人がいてさァ。よく聞いてたらその人、飼い犬に向かって『人！』って呼んでたんさ。なんか怖くない？」
N氏は腕を組んでしばし考え、首を振った。
「別に。よくわからん。ただの変な人だろ」
これだ。彼は霊感はあるくせに「怖さ」を見つけようとしないのである。幽霊だとか得体のしれないものだとかは内心怖がって認めていても「違う」と言う。
N氏の目の下にあるクマや死相だって私は「そいつら」のせいだと思うのだが、彼はあくまでゲームのせいだと言い張りやがる。これが俗に言われていたゲーム脳の恐怖である。
私が黙っているのが気になったのか、彼は話を変えた。
「犬か。猫なら昨日会ったぜ。別に全然怖くない普通の猫だったが。俺に体をこすりつけてきて手を舐めてさ……可愛かったな」
「ああ、普段なかなか触れないからね。N氏が背負ってるもの見て逃げ出すから」
冗談の通じないN氏は眉間にシワを寄せた。
「だからそんなもんいねえって」
私は笑って済ました。コップに残った麦茶を飲み干して置く。それを見つめていたN氏はゆっくりと話し出した。
「でも不思議な猫なんだよな。猫なのに毛がないんだ」

スフィンクス種か。
「肉球もない。耳もなかったし。それにしっぽは丸くて赤いんだ。体は青いし後ろ脚で立って――」
一つ聞いていい？　私はそう前置きしてから尋ねた。
「それ、どうして猫ってわかったの？」
夏の昼下がり。部屋の中が一気に静かになった。N氏は目を泳がせたまま何も言わなかった。
「いや猫は……猫だから。たしかに鳴き声も猫らしくない変なおばさんみたいな声だったが」
N氏が出会ったモノ。本当は何だったのだろうか。
傍にあったアニメージュを見て、私は天啓を得た。稲妻が背骨を突き抜け尻まで流れ、今度は逆流して心の臓を貫き脳天直撃セガサターン後、豆電球がパッと点灯した。
「……それ、ドラえもんじゃね？」
N氏はハッとした顔で、ぽんと手を叩く。何度も頷いては唸る。
「そうだそうだ、ドラえもんだったんだよ！　いやー、怖いと思えば何でも怖くなるなー！」
私とN氏はお互いに肩を叩いて笑い合った。
……今となっては良い思い出である。彼とは大学時代によくつるんでいたものだ。
とはいえ私は、いまだにN氏の本名を知らない。名前を知らないということは、その者の本質を捉えられないということである。従って彼は謎の人物として私の心に生き続けているというわけだ。
――最悪である。

筋肉は人を愛するのだ騒動

動機が薄ければ薄いほど――逆に悪意は強ければ強いほど「怖い」ものである。

映画『シャイニング』が何故あれほど怖いのかといえばそれはジャック・ニコルソンの邪悪な顔のせいだと結論づける――のは安易過ぎる。むろん半分以上はそれが占めているに違いないけれども。

原作小説やキング版映画では、あの父親は館に潜む霊にとり憑かれてしまったのだとはっきり描かれている。そこで最も有名なキューブリック版を考えるに、ニコルソン演じる父親がおかしくなったのはアル中のせいなのか霊のせいなのか判然としない。彼は元々ああなのか、いきなり発狂したのか。

何故？　理由も動機もわからないまま。

ただひたすらに苛烈な悪意をもって斧でこどもを追いかけ回すのである。

――動機なき悪意。外側しかないもの。つまりそれが「怖い」。

つい先日、謎の死を遂げたN氏はいわゆる「シックス・センス」的な人であり、やれ見えただの殺されかけただの、常日頃私に新鮮な話題を提供してくれていた。大学時代、私はよく遊びに行ったものだ。

「これ、いつの？」

N氏の部屋、押し入れに貼られた御札は年季が入って炭のようになっていた。

「あー？　昨日かな」

昨日という言葉に私は衝撃を受けた。きっと貫ったばかりの状態は清潔感溢れる白だったに違いないのだが、霊を招くN氏の体質ゆえにたった一晩でこの「驚きの黒さ！」という羽目になってしまったのだ。

きっと盛り塩でも置こうものなら器ごと破壊されて世の女性にとり諸悪の根源たる砂糖へと変貌し、地獄の業火にていい感じに焼かれカルメ焼きになってしまうことは読者諸氏にも想像は難くないと思う。

「昨日、何かあったの」

「その押し入れから誰かが出てこようとした。手までは出てきたんだ」

N氏は指先で畳を撫でた。編み目で爪が、カリリと鳴った。

「それで指相撲でもしたかい、アハハ」

「今思えば、細い指で色白の、キレイな手だったな」

他人の言葉をスルーするのは人として最も憎むべき行為である。しかし相手が「あの」N氏であるということに一抹の憐憫をもって私は許した。

「俺はとにかく夢中で、出て来ようとする腕を押し込んださ。不気味だったけどな」

「……へえ」

私は傍にあった雑誌『相撲』を開き、関取のグラビアやピンナップを眺めていた。

「おい」

N氏が苛立った声で呼んだ。私は顔を上げる。

「それで御札を貼ったのか。それだけ？　通報もしてないの？」

N氏が素晴らしいのはそれで平然としているところである。もし相手が人間なら、ということを考えない。まだ生きていて、今この瞬間に……。

ぴりり。

視界の隅で、御札が破れて落ちた。押し入れの扉が少しだけ開き、隙間から手が伸びる。N氏の言う通り美しい女性の手だった。優しそうなあの白い手で色々なことをされてみたい。叩かれたり撫でられたり刺されたり挿されたり……。

いやいや私はそんな誘惑には負けないが、N氏だってきっとかの

女性にそうされたいに違いない。仕方あるまい。私は近づき、手を握って引っ張った。軽い抵抗がありながらも、するりと押し入れから出てきた。
我々の予想は概ね当たった――のだけれども、途方に暮れた。
「あー。手だけだね」
「手だけか」
肘までしかその手はなかった。しかし動いていた。私が手を放すと、それは新種の生物のようにかさこそと畳を這ってN氏へ向かう。
N氏の身体をよじ登り、首を絞め――るかと思いきや頬に擦り寄る。
「いまどきアダムス・ファミリーネタか……君にそうとう懐いてるみたいだけど」
N氏は手を踏みつけて動けなくする。爪はがりがりと畳を引っかき、次第に血が混じり始めた。
「さて、『ムー』に送るか、動画を公開するか、警察に引き渡すか、謎の研究機関に見てもらうか。どうするの？」
N氏はその全てを無視して結論を出した。
「あるいは面倒をみるか、だな」
「こんな得体の知れないものを飼うってのかい……」
N氏はかつて見たことがないほど渋いダンディズム溢れる表情をして私に言う。
「手だけでも一応自分を好いてくれてる女だからな」
西日が部屋に射してN氏の顔に影を作る。一見カッコイイ台詞のはずだったが、何故だか哀愁が漂う。
「それにシグルイで言ってたんだ。筋肉が人を憎むってな。それなら、筋肉が人を愛することもあるだろうよ」
筋肉。それ即ちボディ。つまり今は手。もはや脳が人を愛するのではない。筋肉が人を愛するのだ。アインシュタインでも思いつくまいこのコペルニクス的転回。さすがN氏。最先端を行く貴君の愛はもはやその境地に達したか。文字通り彼はこれから彼女と手に手

をとりあって暮らしてゆくのだ。
私の筋肉は知らず知らずのうち、彼に敬礼していた。
N氏の言動がよほど「心」――我々でさえそんなものがあるのか不明だが――の琴線に触れたのか、「彼女」はうち震えながら卓上のペンを持って紙に何かを書き出した。
目を細めたN氏は、それを読むなり「彼女」を掴んで窓の外へ放り投げた。紙を破いて捨てる。
「……怖かったなー。今までで一番かもしれん」
静かな部屋でN氏は軽く笑いながら言った。呆気にとられた私は何のことか尋ねたが、教えてくれなかった。
結局、N氏がトイレにたった隙にゴミ箱から紙片を取り出し、パズルのように並べ直した。
思わず私は例の台詞を呟いていた。
「怖いか……？　やー、怖いと思えば何だって怖くなるね」
そこにはこう書いてあったのである。
――「やらないか」。

マスクドなんとかさん騒動

一時期、N氏が本気で参っていたことがある。ただでさえ少ない口数は減り、口を開けば眠れないと言う。表情筋は動かない。これはもはや本人が気づいていないだけで実は死んでいるのではあるまいかと疑わせるほどであった。そんな当時の話だ。

さて読者諸君には全く興味のないことであろうが、私は祭りがひどく怖い。人間の意思が詰まったスクランブル交差点じみたあの空間は、卑屈かつ社交性皆無の精神に塩をすりこみ、見事に萎えさせてくれる。

お祭りというのはハレの舞台であり、そこは日常から乖離した異界である。神社で行われるのも頷けるが、そんな場所で人間の姿でいるのはむしろ場違いだ。プリキュアやらライダーやらのお面をつけて別の者になるのはそういう意味で至極正しい。

イタリアはヴェネツィアで開催される謝肉祭では、古くは仮面で身分の差を隠してハーレクインロマンスめいたことを行ったというので、やはり「祭りと日常の自分を隠すこと」は関係が深い。多数の人間が集まり、しかし仮面によって匿名性が保たれる。まるで肉体を捨てた人間の意思だけが集まっているような。そこに「ヒトならざるもの」が混じったとしてもおかしくあるまい。

似たような理由でとあるネットゲームも嫌いである。いや、嫌いというよりもやはり怖いのだ。そこの奴らは「年がら年中ハレハレユカイ、楽しまなくちゃウソでしょ」状態であるので。当時のN氏はまだ、匿名の悪意という怖さを知らなかった。

さてようやく本編。

それは先日消滅なされたN氏が、ある年の冬に経験したことである。彼は季節感を大切にする男で、秋には異常に食いまくり冬になると大学にも来ず引きこもってしまう。友人たちはそれを「冬眠」と呼んでいた。

私が冬休みで実家に帰っていた頃、なんとなくIフォンを見ていると冬眠中のN氏から久々にメールが入った。最近ネトゲに嵌まってしまい、ほぼ昼夜逆転のブラジル時間で生活しているとのことだった。

N氏は積極的にゲームを楽しむというよりも、一定のコミュニティ（ゲーム中では「クラン」という名だった）内でチャットなどをしつつ、気が向けばクエストをこなすということをやっていた。すぐにクラン内の人々と仲良くなり、かなり楽しんでいるようだった。

特にやたらと攻撃力の高い女僧侶さんが天然で良いと言っていた。

「そりゃ良かった。で、何かあったの？」

N氏は用事がなければ連絡をすることは無い。メール文を読むと低い声が脳内再生される。

「変なやつがずっと付き纏ってきててよー。言動もおかしいんだ。このままでは俺の寿命がストレスでマッハなんだが……」

聞けば、N氏が一人でクラン部屋にいると、そいつ（露出度の高い女弓使い）が近寄って来たらしい。クランメンバー十人が一堂に会することは珍しく、N氏が話したことのない者さえいる。

同クランのマークがそいつに付いていたことから、初めて会う仲間かと思って適当に話を合わせようとしたが――できなかった。

好きですけどきのうあしがいたかったのに地球がわるいのはダメな鳩派じゃないですか

続く口汚い謎の地球批判と政治批判と支離滅裂な言動。噛み合わない一方的な会話。N氏はいくらか返事をしたが、思わず逃げるように落ちた。

しかしそれ以来、女クソ野郎弓使いはN氏が入ると同時に入ってきて付き纏うようになってしまった。

「クランの人はなんて？」
「それがよ……」
N氏はリーダー格の男忍者と、実生活でその奥さんだという男騎士に聞いたそうだ。
「……そいつは昔の仲間で、ずっと姿を見せなかったから忍者さんは心配してたらしいんだ。元々はオフでの友達だったとかで、生存確認できたのはいいが、おかしくなってるとは……って言ってたな」
ここまでくると普段の私なら俄然ワクワクが止まらず、キャラを新たに作って参戦し問題の女死ねばいいのに弓使いを見に行くところであるが、今回ばかりはやめておいた。
ネトゲ空間はキャラという仮面をつけた匿名の世界。何があるかわからない異界なのだ。
「どうすりゃいいと思う？　俺は始めたばかりでよくわからんが、お前なんでも知ってるだろ」
なんでもは知らないが、ある程度は知っている。クランは他人から招待されて入るシステムだ。さらに一旦入れば、他人が強制的にクランを辞めさせることはできない。
「となると……以下から好きな方を選んで。一、そいつ以外の全員でそのクランから抜けて、新しいクランを作り移住する。二、君のキャラを新たに作り直す。念を入れて新規アカウントで」
結局、クランの人々とも話し合い、N氏は上の二つを同時に行うことにした。

私は実家から戻り、すぐさまN氏の部屋を訪れた。ドアが開くなり挨拶。
「明けましておめでとう～！」
何の返事もせず、N氏は奥へのそのそと戻っていった。まるで人生に疲れてしまった隠居ジジイのようである。
N氏はPCの電源を落とし、真っ暗なディスプレイの方をちらりとも見ない。長いため息を吐いて顔を押さえると、こぼした。

「女弓使い、まだいるんだよ……」
N氏はアカウントもキャラも変えたが一発で見破られた。更に女腐れ外道弓使いは新しいクランのメンバーになっていた。
奴を誰が招待したのかと、疑心暗鬼になったクランは今や崩壊の危機に陥っているらしい。
「もう、どうしたらいいのか……」
「もうネトゲやめたら？　ね、ロクなモンじゃないって。プレイヤー情報も非公開の集団でしょ。そんなことで仲が悪くなるなら、その程度の人達なんだよ」
数秒落ち込んでからN氏が私を睨んだ。血走った目に、少し心が痛んだ。
「お前、本当はもう一つくらい案を隠してるんじゃないのか」
私が反射的に目を逸らすと、N氏は詰め寄ってきた。仕方なく考えを話す。
「三、クランのメンバーが会うたびそいつに辛辣な罵詈雑言を浴びせかけてやめるまで追い込む。マジな人じゃなくて、意味不明な言動を模した愉快犯かもしれないから、そうだと決め付けて徹底的に容赦なく滅茶苦茶にやること」
N氏は私の胸倉を放して、考え続けていた。十数分後、麦茶を飲んで私に尋ねた。
「どちかというと、大反対だ。それで逆上してきたら、どうなる」
私は笑って言った。
「もっと面白くなる」

事態は最悪の方向へとシフトし続ける。男忍者と男騎士以外のクランメンバーは、あらん限りの罵声でもって女ゴミ屋敷弓使いを一旦は退散させた。
しかし平和な日々は一週間程度だった。またもや現れてくっついてくるそいつはもはやN氏のトレードマークとしてネトゲ世界で有名になりはじめていた。

私はN氏に会うと、様子を見るためPCを起動した。ゲームへ接続すると、すでに待ち構えるように女弓使いがいた。無言だった。
「所詮ゲームだからさァ、そんなに本気になっちゃダメだって」
鬱々としたN氏は地獄で働かされる罪人のような顔で、違うんだよ、と呟いた。
「少し前、男忍者さんと男騎士さんが、オフでそいつの居場所を調べて行ってきたらしいんだ。問題です……そいつ、どうしてたと思う」
お前、クイズ出すようなキャラじゃなかったろ……という台詞をグッと飲み込んだ。
「三、二、一、ブッブー。正解は『自殺していた』です」
プレイヤーの死んだキャラが何故N氏に付き纏うのか。オフの関係なら男忍者たちであるはずだし、恨みから言えばN氏含め追い込んだメンバー全員のはずだった。
「これが俺の体質のせいなのは確定的に明らか」
N氏の霊媒体質はネット世界でも遺憾無く発揮されていたことになる。私は彼の様子を見てひとしきり爆笑した後、ディスプレイのキャラクター達を指差した。
「思い上がっちゃダメだよN氏、霊が操作してるわけじゃない。このプレイヤーのアカウントでログインした奴が女弓使いを操作してるんだ。つまり犯人は人間。情報、見てみ」
N氏は傍にいた女弓使いのデータを閲覧した。以前は非公開設定だったのが、今はアカウント名がわかるようになっていた。
続いてクラン部屋に行く。
「あ、N氏。ほらほら、珍しくクランメンバーが全員集まってるよ」
訝しがりながら、N氏はメンバーの情報を見ていった。すぐに彼は身体を強張らせて呻いた。
「何だこれ……」
クランメンバーは女弓使いも含め、全て同じアカウントだった。つまり同一人物がN氏以外の全員を操作していたのだ。自分で自分

と会話する。自分で自分と喧嘩する。
「ＩフォンとノートＰＣと大学のＰＣを使ったら、ギリギリ三人同時まで会話できたね」
Ｎ氏が振り向いた。その表情は驚愕と恐怖と安堵と素敵なものを沢山入れてケミカルＸを混ぜて爆発させたようだった――つまり大混乱状態、と。
「最初から……？」
頷く。
「全部……？」
頷く。
「あのちょっと天然で可愛い、力技が得意な女僧侶は？」
スマン、ありゃ私だ。Ｎ氏の好きそうなキャラを演出した。
「自殺とかは……？」
そもそも私一人でやってるし。
「なんで……？」
実家にいて暇だったから。Ｎ氏をビックリさせたくて。
「確かに度肝を抜かれたが」
Ｎ氏はいいかげん私を殴るかと思ったが、そうはしなかった。悟りの境地に達して後光が射し、アルカイックスマイルを繰り出した。ここで人間不信に陥るような並の人間ではないのがＮ氏がＮ氏たる所以である。
「あれ、なんだか涙が出てきたんだが……」
「おや、今度こそ霊の仕業か」
Ｎ氏は全力で私の額を叩いて、おめえの仕業だよ！　と叫んだ。
「いやさ、怖くしようと思えば、なんだって怖くなるからさァ。実験よ実験。ネトゲだってこんなことも有り得るっていう」
私は飯をおごって弁明をしたが彼は聞く耳をもたなかった。結局、目の前でアカウントを消去し二度とネトゲをしないと誓うまで許して貰えなかった。

その後どうやら彼にはあの出来事が明確なトラウマとなったようで、アカウントは初対面でキッチリ確認するようになったという。

拾い集める４の数字騒動

色の白い娘が毒々しい色彩のメロンソーダを吸い上げる。〈黒き真実の壷〉の置かれたテーブルを挟み、泣きそうな顔でＮ氏に話しかけた。

「彼にも相談したかったんですけど……」

――チッ。彼氏いるんなら彼氏に頼れよ。

Ｎ氏の顔を翻訳してみると、こんなところであった。

「でも彼、『呪い』で死んじゃって……」

我々は顔を見合わせた。Ｎ氏の顔には「オイオイなんでこんなことに？」と書かれている。むろん私の顔にだってそう書いてあるに違いないのだが、しかし何故かと問うても答えは一つ、いつだってＮ氏の体質のせいというほかはないのである。

さて、怖いと思えば何だって怖いのである。しかし今回、読者諸君にはこの言葉の裏を提言したい。然るに「怖くないと思えば何だって怖くない」のであると。全ては「幽霊の正体見たり枯れ尾花」というわけで、恐怖はあなたの五感と脳に巣くっている。

ハイチに伝わるヴードゥーの「呪い」を知っているだろうか。それは対象者の恐怖を利用し、信じなければかからない。にもかかわらずハイチでは呪いが「実在」しており、実際毎年何十人と衰弱死している。この矛盾があなたをグラグラとした平均台の上に乗せる。あなたはまさか「呪い」を信じてはいないだろうが、どうなろうとその態度を崩さずにいられるだろうか？

話を始めよう。

Ｎ氏はひどくやっかいな男である。埋葬されて幾日か経ったような顔色、かもされた風貌をしてはいるが、人並み程度の悪意さえ持ち合わせていない人間である。しかし読者諸君が「ただの人間には

興味ありません！」と彼を見限るのはいささか早急に過ぎる。「やっかい」というのは「厄」を「介」すると書く。彼の恐るべき霊媒体質は犬も歩けば棒に当たるといった風情で周囲や自身も含め奇妙なことに巻き込んでしまうのである。つまり彼は悪くない。非常に不運な星の下に生きているだけなのである。

そうした出来事が連なったせいで、ある日から彼は自室にて引きこもるようになった。そんな当時。

珍しくN氏が出かけようとしていた。私の顔を見るなり「お前は来るな」と言った。ひどい言い草である。

「あれ、何か面白いことがあるのかい」

「いや、ねえよ」

即答するN氏。その愛想の無い態度は変わらないが、普段よりしっかりした生地が使われたチェックのシャツ、直前に風呂に入った様子、剃り残しの無いヒゲ――これは誰かに会いに行くということが予測できる。

そしてそれは男ではない。何故なら長期的に引きこもり続けた彼はもはや自身の見てくれについて考えることをやめ、身嗜みを整えるなどという瑣末な事柄には囚われないという残念な方向に達観した男だからである。

しかし相手がこと女性――特に運命と新たなロマンスと乳繰り合いへの欲望と寂しさと焦躁感と何かしらのトラウマを解決してくれそうな者か或いはそんな空気と全く関係のないほんわかふわふわした者であれば話は別である。滅多にないことであるが――これは……そうか、わかったぞ、間違いなく女性が相手だ！

私の頭の中のコナンはそう告げた。

さらにここ数週間のN氏の動向を逐一チェックしていた私であるが、彼は外に出ていない。N氏は学業や単位などという瑣末な（以下略）だからである。となればネトゲ関連のオフ会ではないか？

N氏がはまっているネトゲの名前をおもむろに呟いてみる。彼は素知らぬ顔で目を逸らしたが、その視線の先に見るべきものはない。

反射的に逸らしたのだ。
ヒット。ネトゲである。
たまたま同じネトゲをやっていて、たまたまここ名呑町に住んでいて、たまたま会う気のある女性。
……そんな女、果たして存在するのか？
様々なことが脳裏を過ぎったのであろう、N氏は携帯と交互に私を見ながら恐る恐る尋ねた。
「お前じゃ……ないよな？」
「何のことだい」
とぼけつつ、自分の推理が概ね当たっていることを確認する。
「いや、いい」
N氏は自転車に跨がると、颯爽と漕ぎ出した。私は見送りながら内心苛々している。誰かが幸せになりそうな状況は非常に腹立たしいものである。読者諸君も異論は無かろう、N氏のフラグを全力でバキ折りに行こうではないか！
数十分後、私は近所のファミレスで目をみはっていた。遠いテーブルでN氏が楽しげに話しているが、その向かいに座った娘は――非常に可愛いらしかった。
線のような目でドジを穏やかに笑ってごまかす。口元にあるほくろとストローを吸うために髪を耳に掛ける仕草がエロく感じるのは私がアホだからであるわかっている気にするな。また天然気味な彼女にN氏がツッコミを入れるなど良い雰囲気である。二人のバックにぷりぷりした肉付きの良い天使がラファドラソーラファドラソーとラッパを吹いている。ああ、N氏がこのような陽の当たる場所にこようとは。
食事を終え、二人がジュースやココアを挟んで和やかに談笑していると、娘の方が深刻な顔になった。N氏も目を細めて頷いている。
こうなると、声の聞こえないのが悔やまれる。やはり盗聴機を導入するべきか――などと考えていると、娘がおもむろに「壷」を取り出しテーブルの上に置いた。

一瞬で状況がわかったN氏の顔は凍り付き微動だにしない。おうおう、さすがはN氏。全く、不幸キャラを徹底している。彼女が一生懸命話せば話すほど、N氏の態度は悪くなっていく。頬杖をつき窓の外を見て露骨にため息を吐いた。

右肘のあたりをボリボリと掻く。私がフラグをどうこうするまでもなかったか。

立ち上がり、N氏達のテーブルへ行った。彼は既に気づいていたのか慣れているのか驚かない。私への挨拶もそこそこに娘は「壷」についての説明を始めた。

どうやらこの娘は新興宗教「とある科学」の信奉者らしい。小さな黒い壷を愛しげに撫でている。

「この〈黒き真実の壷〉を買うと真実がわかるようになるんです。おかげで、私ホントに騙されなくなったんですよ」

――あんた既に騙されとるがな！

「騙されたと思って使ってみて下さい！」

――いや、騙されたと思って騙されるんでしょうが。目の前に有意義なサンプルがいるのでこれでわからなければアホである。

娘の説明を聞いていると、私は胃袋の底から苛々した気持ちが這い出てくるのを感じる。つい私は一つ一つにツッコミを入れ、次第に声が大きくなりボルテージが上昇していく。

「大体、人を騙すのは悪いことだって知ってるでしょう！」

テーブルを叩くと、娘は鍋に入れた白菜のように萎んだ。N氏が苦々しい顔で呟いた。

「お前……よくそんなこと言えるな」

言えるとも。しかし。

「勘違いするなよ。N氏を騙すのは、この私だけだ」

空気が止まった。音も無い。周囲の食事客もいなくなったように感じる。

「え……いや……え？　どういうこと？　そんな話してた？」

N氏と娘は困ったような目で私を見た。なんとなく勢いで発言し

てこんなことになり私だって困っている。むしろ私が一番困っている。

「さて」

無理矢理仕切り直した。

「この壷が本物だとしても、そんなものにお金を使うなんて『私は騙されるアホです』と言ってるようなもんだよ。つまりは敗北宣言。絶対に私もN氏も買いはしないし、既に君が哀れに思えてきている」

N氏が頷いた。正面の娘は口をきっと結び、俯いて震えていた。のみならず目に涙さえ浮かべていた。さて傍から見れば悪者は誰だ。男二人が娘さんを泣かせている。

「キモいあんたらなんかに私のことがわかるもんかー！」

言うてはならぬことを吐き捨てて、娘は立ち上がり走っていく。むろん我々はすぐに追いかけた。

N氏が彼女の腕を捕えて引き止める。

「もうやめて！　誰も私のことなんかわかってくれないのよ！」

娘が叫んだが、N氏は複雑な表情で静かに言った。

「いや、俺、あんま金ないから……自分の分くらい払ってくれ……」

N氏がレシートを渡す。私もついでに手に持ったモノを渡す。

「忘れてるよ、〈黒き真実の壷〉」

「……じゃあ、話を聞いてください」

我々の振る舞いの何がどう彼女の心に作用したのかわからないが、とにかく席に戻って相談を受けることになった。

驚くなかれ、十代にしか見えない彼女――丸木戸サド子は三十歳である。彼女は天才的に騙されやすく、これまで幾度となく詐欺やスピリチュアルな何かに引っ掛かってきた歴戦のカモであった。その原因は極度の不安神経症――要するに「怖がり」であり、何か不安を煽られると馬鹿馬鹿しいとは思いつつも気になりすぎて夜も寝られず最終的には騙されてしまう。

余りにも騙されて人間不信に陥ったところを宗教「とある科学」に救われ入信してしまったらしい。
すかさず「全然人間不信になってねえ！」と言ったのはN氏であるが、丸木戸さんは平然と「ちっぽけな人間など信じていません。信じているのは大いなるクトゥルフ神ですから」といっそ清々しいくらいの騙されっぷりであった。
そこで〈黒き真実の壷〉を買い、騙されるという不安からは解放されたのだが、今度は教団の言う「終末と呪い」への不安が押し寄せてきているというのである。
この壷を一人三つ以上広める――端的に言えば「売る」――ことができなければ深海に潜むクトゥルフとやらが起こす終末が近づき、その「呪い」により死ぬらしい。何故そんな迷惑きわまりない神を信仰しているのか全くわからない。また我々に言わせれば一人三つなど、どうせ経理部の作成したノルマであろうとしか思えなかったが。
「私の彼、呪いで死んじゃったんです……」
丸木戸さんは寂しそうな顔をした。
「期日までに〈黒き真実の壷〉を売れそうにないって言い出したあたりから呪いが――彼の周囲が〈四〉だらけになっていったんです」
「〈四〉だらけ？」
彼女はゆっくりと頷き、垂れてきた前髪を留め直した。
「はい。彼が揃えたわけでもないのに気付けば部屋には〈四〉つの空き缶、〈四〉つのぬいぐるみ、それも〈四〉つ足のもので、携帯には毎日〈四〉つの着信と〈四〉つのメール――数え上げればきりがないの」
N氏がうんうん唸った。うなされているような声だったが、どうやら思考中のようである。ふとひどいクマのある顔を上げた。
「それ、見覚えのあるものが〈四〉になってるってことだよな？例えば見知らぬぬいぐるみが勝手に増えて〈四〉つになってるわけじゃなくてよ」

なにそれこわい。
「ううん、一つ一つのことは起こりうることなんだけど、〈四〉だらけになるんです。それで先月、彼は午後〈四〉時〈四〉十〈四〉分に死んだ。でも彼、すごく怖がってたから――今は不安から解放されてよかったのかもしれない。『とある科学』もあんなに大きなセレモニーを開いてくれたし」
丸木戸さんが手で包むように持っていたせいでメロンソーダの氷が溶けた。ストローがコップの縁を滑った。
なるほどこの世には死より強い不安というのがよくあるものなのか。
「死んで、よかったもクソもないな」
N氏は相手を頭から真っ二つに切り捨てるように言った。彼女は下唇を噛んで泣きそうな顔になった。私は人前ですぐ泣くような人間は――あまり好きになれない。涙は他人を動揺させて言うことを聞かせようとする。
とはいえN氏の言い方は、身近な人を失った者にかけるにしてはあまりにも彼らしすぎた。私はN氏の脇腹を肘で突いた。
「……ホラ、今から丸木戸さんは呪いで死なないように構えなくちゃいけないからですし。N氏が言いたいのは死んでいいとか言ってちゃダメだっていうことじゃないですか」
フォローになったのかわからなかったが、彼女は話を続けた。
「でも私も、もう〈四〉の呪いは始まってるんです。例えば」
丸木戸さんはテーブル上にあった楊枝入れから、一本一本袋詰めされた楊枝を並べていく。思い詰めた顔で。
「……四十二、四十三」
楊枝入れにはそれだけだった。しかし塩の小瓶に隠れるように落ちていた最後の楊枝を拾う。
「四十四。ね？」
戦慄を覚えた。どこにも仕込む隙はなかったのである。N氏はじっと楊枝を睨んでいる。

「その壷、いつまでに売らなきゃならないんですか」
「今日。あと一つだけなんですけど、買って……くれないよね」
我々は強く頷いた。そんな金があるわけないのである。彼女は力無く笑うと、レシートを持ってレジに向かっていった。
「どう思う」
腕を組んで黙ったまま、N氏が視線で尋ねた。私は立ち上がりながら言う。
「今の楊枝はすごいけど……やっぱり騙されてると思うよ。彼氏さんのくだり、おかしくなかった？」
N氏も荷物を持って立ち上がった。首を捻る。
「午後四時四十四分に死んだ。死亡推定時刻って、そんな正確にわかるもんかな？　それに〈四〉が並ぶと言いつつ、午後〈四〉時というのは十六時だって『言えてしまう』。どうして午前四時ではなかったのかな」
我々は彼女に追い付いた。別々に払うと思ったらまとめて計算されていた。
「一四四四円ですね」
レジの女性は笑顔で言った。丸木戸さんは表情を曇らせた。しかしながら我々の分を払おうとする。私はN氏が財布を開くのを見つつ主張するように身を乗り出した。
「あの、これもお願いします。それから、別々で支払いを」
私はポケットから自分のテーブルのレシートを取り出してレジ係に渡した。合計は一六六〇円になった。丸木戸さんが振り向いた。
「ここは私が払います。迷惑をおかけしましたから」
払ってもらうのはやぶさかではないが、そうなると何か代償を求められている気になる。N氏は露骨に嫌そうな顔をしているが。
――でもごめんN氏、これは面白そうなことだと思う。あと私、財布忘れたんだ。
「じゃあ御馳走になります。代わりに『呪い』を解くのを手伝いますよ」

私に向かって、N氏は半笑いで言った。
「それ勝手に俺を入れてるよな」

丸木戸さんの住んでいる家まで行く途中、私は今日が四月十三日だということに気がついた。流れ通りならば彼女は恐らく明日の四時あたりに死ぬことになるのであろう。
私とN氏は家にお邪魔してその時刻まで一緒にいることにした。彼女の母親に笑顔で迎えられ、部屋へ向かった。
「もう、おかーさんってば一つ多い！」
後から母親が持ってきた盆には麦茶が四つ並んでいた。
「あら……四人じゃなかったかしら」
母親は首を傾げたまま、一つ持って居間に戻っていった。N氏も丸木戸さんも私も「〈四〉つか……」と思っているのは明らかであったが、口には出さなかった。
「『呪い』を解くって、どうやるの」
氷の入った麦茶を傾け、N氏が渋い顔で答える。
「世の中、不思議なことは何だってあるもんだ。幽霊だって俺はよく見る。部屋代の半分は払ってもらいたいくらいな。で、幽霊にゃ理屈はないが『呪い』は人間が使っている時点でルールがないとおかしい。そして――それくらいしか俺にはわからん、具体的にはこいつに聞いてくれ」
おい。不意打ちで投げっぱなすくらいなら話すなよ。ちょうど口を出したかったところではあるが。
丸木戸さんが迷子の子どものような顔をして私を見つめた。何か手伝ってあげたくなる。
「まず彼が今言ったことは全部信じないでください」
N氏を見ると、壁に寄り掛かってにやりと笑っていた。
「怖がりの人は、幽霊や呪いは信じないこと。度胸試しもしない近づかない徹底的無視。それが一番です」

幽霊をよく見るN氏を全否定だが、私は怖がりでありオカルトをフィクションだと思っている。奇妙なことはあるかもしれないが幽霊はいない。怖さは見極めて、離れて愉しむだけのエンターテインメントなのである。

「ところでハイチに伝わるヴードゥーの『呪い』を知ってますか。ハイチでは毎年何人も『呪い』で死にます。『呪い』の多くは細かい点を除くと同じメカニズムなんです。さてその手順はこうです。

一、まず対象者が『霊的なもの』が実在すると信じていること。信じていなければかからない。

二、呪術者は対象者に『呪い』をかけたことを告げる（死の予言）。この際、客観的事実として受け入れられやすい第三者によって知らされるのがベター。

三、対象者は不安と恐怖から『呪い』の予言を自己実現させてしまう。ありふれた日常の偶然を、予言された『呪い』のせいだと思う。やがて自分は死ぬに違いないと思い込み――飲食が不可能となり、飢餓・脱水症状を起こす。

四、対象者が死ぬか入院するかして、その界隈に『やっぱり呪いは実在する』と信じる者が増えて悪循環する。以上です。『呪い』というのは基本的にこの形式に則るので、信じなければかかりません」

丸木戸さんはうんうんなるほどと頷いている。素直すぎる。なんとなく彼女が騙されやすい理由がわかった。

これなら明朝四時までに「呪い」を信じなくなるのも可能だろう。そこへN氏がしたり顔で口を開いた。

「まあ、その手順の説明も〈四〉つになってるけどな」

心底余計なことを言う男である。私に何か恨みでもあるのか。身に覚えがありすぎて困る。

丸木戸さんはいっそう不安げに我々を見た。これは、信じないようにさせるのは骨が折れるやもしれぬ。

信じたまま「呪い」を解く方法はあるのかわからない。私は咳ば

らいをして続けた。
「五、気をつけねばならないのは、対象者の受けた『呪い』は他者に渡すことができること。初めの対象者は助かり、今度は渡された者が『呪い』にかかるという点」
　こうした「呪い」は意識の問題なので、誰かに渡すことさえ可能なのである。風邪は他人に移せば治ると思い込むのに近い。というのをたった今、私が付け足した。嘘である。しかし信じれば本当である。
「で。丸木戸さんは『呪い』の話、誰から聞きましたか」
　見当はついている。
「死んだ彼から、だけど」
　そういうことなのだ。
「そして――彼が死んでいる様子を、丸木戸さんは見てないですよね。又聞きでしょう？」
　彼は何故午後四時四十四分に死んだのか。まず単純にそんな正確に死亡時刻は割り出せない。となると彼女にそう教えた者がいるのだ。
「うん。教団の人に聞いて……」
　第三者を装って「呪い」を強化している。
「教団『とある科学』の葬式のやり方は？」
　丸木戸さんが怯えたように答える。
「夜にしか行えないセレモニーをして、誰も見ないように灰にして海に流します。クトゥルフに還るように」
　なるほど。
　やはり午前四時に死ぬと困るのは、故人と会わせることのできる時間をなくすため。できるだけ早く――その日の夜には教団内でセレモニーを行い「彼が呪いで死んだこと」「灰にして海に流されたこと」を認識させるためである。
　丸木戸さんにしてみれば、彼の死体を一度も見ないまま「呪い」だけ残されたということになる。

「おそらく彼は『呪い』をあなたに渡しています」
さっき母親が、私達を四人だと思った、と言った。恐らく玄関の時点では四人目が傍にいたのである。
「彼は生きています」
二人は一瞬理解できなかったようで眉をひそめた。私は指差し、N氏と丸木戸さんの視線を誘導した。うずくまる影が薄いカーテンに映っていた。ベランダのそれは立ち上がり、窓をカラカラと開けて入ってきた。
「……すまん、サド子」
坊主頭に、金のピアスを付けた耳。細い目に紫色の唇。煙草の臭いが漂った。頬がこけ、裂けそうなほどにV字の口を不快にニヤニヤさせる。ドラッグでもやってんじゃあないか？
はっきり言って苦手な類である。コンビニの前でたむろして酒を飲んでは大声で下ネタを叫ぶ類。どれだけバカで悪いことをしたかで評価が決まる類。フリスクをラップに包んで「マジに効くから気をつけろよ」と一粒五千円で売れば買うような類。
というのが私の顔に出ていたのであろう、N氏がぼそりと「たぶん俺もあいつ嫌いだわ」と耳打ちしてきた。
「人を見かけで判断するんじゃないよ」
N氏が「こいつ信じらんねえ」という顔をした。
「マゾ太……」
丸木戸さんが彼に抱きついた。
「呪いを渡したのはオレだ。教団の言う通りにすれば『呪い』をなんとかしてくれるって聞いてな……許してくれ」
丸木戸さんは既に許している。「呪い」をなすりつけて自分を死なせようとした相手をだ。これが愛？　クソ喰らえとはこのことである。
言葉とは裏腹にマゾ太さんは目が笑っている。どうせ許してくれるだろうと思っていたのか、本気で謝る気はないのか。どちらにせよ、あまりいい人間ではない。丸木戸さんは男にも騙されているの

ではないか。
N氏の顔を見れば怨念と呪詛と憤怒と呆れが入り交じり、さながら地獄絵図であった。彼の言葉をあえて読み取れば「世界など今すぐ終われ」といったところである。
丸木戸さんとマゾ太さんがいい感じになってきた。我々が荷物を持って退散しようとしていると呼び止められた。
マゾ太さんは薄ら笑いを浮かべ、見下すように言う。
「おい、お前ら『呪い』を解けるんだろ。解いてくれよ」
ああ、そんなのあったね。傍らのN氏が眉間にシワを寄せた。
彼は忍耐強い男である。忍耐が強過ぎて、こちらから聞き出さねば滅多に内心を語らない男である。抑え切れないストレスが態度から放射能の如く漏れだして傍から見れば「ああ……キレてんな」とわかるほどになってもまだ忍耐を続ける忍耐中の忍耐野郎である。
然るに彼はこういった相手に対して忍耐強いのに何故かケンカ腰である。
「うるせえな、信じなければかからないんだからよ、そういう風にたぶんイチャついてれば――」
ごん。
N氏の頭が揺れて壁にぶつかった。マゾ太さん――マゾ太――クソ太が殴ったのだ。
「サド子の生死が懸かってんだ。今すぐなんとかしろよ！」
丸木戸さんはひたすらオロオロしている。自分の彼氏なら止めろよ。
今度はN氏が掴みかかった。私はN氏を全力で引きはがす。
「何で止める……！」
N氏は私の顔を見て口を噤んだ。小声で語りかける。
「弱くて不安を他人にぶつける。奴は増水した川の中洲で不安になってる子犬だよ。助けてくれる相手の手を噛むような。さて、そんな時N氏はどうする？　子犬を見殺しにするかい？　噛まれながらでも助けるのが粋なんじゃないかい？」

N氏はしばし考え、口を開く。しかし私は先んじて言う。
「答えは聞いてない」

「さっきは悪かったな……殴ったりして」
マゾ太がN氏に頭をさげた。
「いや、もういいです」
キューバ危機にも匹敵する険悪なムードはある程度の雪溶けを迎え、その頃には四時になっていた。もう四十分程度しかない。
「じゃあ、『呪い』を解いてくれるの」
快く頷いた。私はマゾ太さんをベランダに出した。
「いいと言うまで絶対に入ってこないで下さいね」
にこやかに笑って窓を閉めた。明かりを消す。
N氏と私、それに丸木戸さんは部屋の中央で三角形になるよう、それぞれ座布団を敷いた。さらに座布団と座布団の間には紐を通し、踏めば道筋がわかるようにしてある。
「じゃあ始めるぞ」
暗がりに気配が動き、一度止まり、やがてもう一つの気配がやってきて背中を叩かれる。次は私の番である。紐を踏んでいきN氏――であるはずだ――にタッチする。彼もまた誰かにタッチするまで行く。
有名な「四隅の怪」「お部屋様」「ローシュタインの回廊」などと呼ばれる降霊術を知っているだろうか。
四人で四角い部屋の四隅に立ち、反時計回りにそれぞれA、B、C、Dとする。Aの隅からスタートした一人目が一辺をなぞるようにBの隅に達する。そこで二人目に交代し、一人目はBの隅で待つ。同様に二人目はCの隅に行き交代――を繰り返すと何故かひたすらグルグル続く。
四人目がDからAの隅に来た時、そこには誰もいないはずなのに。
という怪談である。実際に行う場合には、一人目か四人目がサプ

ライズ好きなお茶目人間だと続いてしまうので注意が必要である。
今、これを三人で行っている。「呪い」を信じたまま回避するためには誰かに渡すことが有効なことは、マゾ太さんにより証明されている。
では誰に渡すか。
N氏に？　私も彼もクトゥルフ神や「呪い」の存在を信じていないので渡すことはできない。マゾ太さんは嫌がったので渡さない。
そこで「四人目」の登場である。意識として対象者から他人へ「呪い」が渡ったと感じるのは、他人が多くの〈四〉の要素を持った場合である。
ならば三隅の怪を行い、四人目の霊を呼び、それに「呪い」と「死」を持っていってもらおうというわけである。〈四〉番目に現れるのだからそうなるだろう。
いない席は素通りする。そうして繰り返し全く出ないまま三十分が経った頃、それはルーティンワークと化し、無駄口を叩けるようになっていた。
「今、四時半くらいですかね」
丸木戸さんに尋ねる。暗闇から声が返ってくる。
「多分ね」
「あの……N氏？　さっきマゾ太さんに掴みかかった時にさ」
んー、と軽い返事がある。
「小銭がいくらか落ちたんだよ。マゾ太さんのポケットから。ちょっと渡すの忘れてたけど……そのお金さ」
私の番だったが、途中で一旦動くのをやめた。
「〈四〉百〈四〉十〈四〉円だった」
息を吸う音が聞こえた。
「考えてみたらさ、あの人のピアス両耳合わせて〈四〉つで、あのお茶の数を〈四〉つにしたのもあの人のせいだよね。ここにきて丸木戸さんより〈四〉を呼び寄せてない？　私はまた『呪い』が丸木戸さんからあの人に渡されたんじゃないかと思うんだ……まあもう

すぐ〈四〉時〈四〉十〈四〉分だろうからすぐにわかると思うけど」
そこまで話すとベランダの窓が開いて、マゾ太が入ってきた。どうやら話を聞いていたらしい。そして「呪い」は気にしたら負けである。N氏が警戒して静かに電灯をつけた。
「おい、オレに渡したのか？　オレ、死ぬのか。ざけんな！」
彼は部屋のごみ箱を蹴る。〈四〉つの紙屑が散った。机を殴り、こぼれ落ちた鉛筆は〈四〉本。暴れ回る。
「注意したんだけどな。絶対に入るなって。この場に入らなければ要素が増えずに助かったのにね……ようこそ、〈四〉人目」
現れない四人目の霊の代わり。彼の顔は青ざめていた。
部屋から逃げ出して、ベランダを走り道路に出た。私たちはすぐに追った。彼は……。
偶然トラックに撥ねられた。
偶然反対車線を走る車にも撥ねられた。
偶然救急車が通り、轢かれたが気づかれなかった。
偶然ワゴン車が倒れた彼の脚を轢いて血を飛び散らせたが、もはや何の反応もなかった。
計四回轢かれたことになる。
「四時四十四分ですね」
時計を見て、丸木戸さんに言った。

複雑な表情の丸木戸さんにお礼を言われて別れ、かわたれ時の道をN氏と歩く。爽やかな空気を胸一杯に吸い込み、肺の中に溜まって澱みきった空気を吐き出した。
「なんで奴が入れないように、ベランダに鍵かけなかったんだよ」
彼が苦い顔で言った。
「ちゃっかり忘れちゃって。まさかあんな結果になるとは思わなかったなあ。偶然って怖いね」
N氏はため息を吐いた。

「俺に話した、子犬を助けるって話は」
「私、犬嫌いだからさァ……」
話しながら、彼の膝のあたりに血が付いていることに気がついた。マゾ太が死んだ時の血であろう。血は点々と……四つあった。
私は逡巡したあげく、言うのを控えることにした。結局のところ、気づかなければ「呪い」など存在しないのだから。

百物語

それはまだ友人関係も築けていない青の時代。今ではお隠れになってしまったN氏が、私にぼそりと言った。

「お前だけずれてる……」

――ちなみに私はヅラではない。念のため。

さて、イマジン（想像してごらん）。

あなたは友人と駅のホームに来た。待合席を探し、運よく二つの空きを見つけた。あなたの隣の席にはフードを被った老婆がいた。

軽く「すいません」と言って座り、あなたは友人と話しはじめる。

やがて電車がやってきて、すぐさま乗りこんで。

「なァ、先程のことだが、なにゆえに君は挨拶したのだい」

友人の言葉にあなたは首を傾げる。

「何故って、隣の席に座るし、ちょっとした礼儀じゃないかな」

そこで友人は衝撃的な一言を発した。

――さあここで選択肢である。

A：「ただの人形に？　何故置いてあるのかは不可解だが」→老婆は人形だったのである。

B：「誰もいないのに？」→老婆は存在しなかったのである。

C：「確かに。さっき見たが、あの男、血のついた包丁を持っていたからな。怒らせると面倒だ」→老婆は男だったのである。

D：「水くさいな。いまさら僕に礼儀がどうのなどと」→老婆に挨拶したかと思いきや、実は友人に行っていたのである。

E：「そっちには鏡しかなかったじゃないか」→老婆の正体は自分だったのである。

F：「そのおかげだな。我々が話している時、老婆は君の方をじ

っと見ていたよ。まァ実はまだ君の後ろにいるがね」→終わった話と思いきや時間差。

これらで何が「怖い」かは人それぞれであって、或いは怖くなどないかもしれない。しかしこれらに共通して一つだけ言える。

それは、認識のずれは「怖い」ということである。あなたの見ていたものと友人の見ていたものが違った。あなたと他人の見ているものが同じである保障はどこにもない。

あなたがカワイイと思って撫でているゴールデンハムスターは実は無数の脚を持つゲジゲジかもしれない。しかしゲジゲジに見えるものこそが他人にとってはゴールデンハムスターなのかもしれない。

へけっ。げじげじ。

怪談の基本は「認識のずれ」である。思い込みや時間差による共通認識の崩壊。そのずれた隙間に「怖さ」が潜む。

百物語をしようと言い出したのが誰だったかは失念したが、とにかく私は主催者の部屋へ来ていた。

席に着き周囲を見回せば、当時は名前を覚えているかどうかまだ怪しかった——面々。全員、濃淡や大小やデザインの違いはあるものの、青いものを身につけている。

夕暮れの弱々しい光は微かに残るばかり、やがて暗闇にお互いの顔が溶けていった。

「じゃあ、百物語を始めます。どなたか第一話を——」

ぼんやりとしたヒトの輪郭が声を出す。私は手を挙げて。

「では私から……」

中断するが、さて読者諸君は百物語の伝統的基本ルールをご存知であろうか。

新月の夜に数人以上、L字型に三部屋ある場を使うのが望ましい。手前の一部屋を語りの間、二部屋目を通りの間、奥を灯の間とする。また、錯乱した者が出た際に危なくないよう、危険物は持ち込んで

はならない。
手前の二部屋は明かりを消し、奥まった部屋に百本の灯と鏡を用意するのが望ましい。行灯には青い紙を張り、同じく参加者も青い衣を着るのが望ましい。
……望ましくとも現実にはそううまくゆかぬのが常である。何事においても満足或いは妥協は重要である。
新月と青い服は用意できても、まずここはどう見ても一人暮らし用ワンルームなのである。
「そこで言ったんです――『今度は落とさないでね』」
私は軽い拍手と共に王道の怪談を語り終えた。静かに立ち上がると居間を出て、後ろ手にドアを閉じる。
真っ直ぐ数歩行った先には玄関、右にはキッチン、左にはユニットバスがあるはずだ。むろん全て暗闇である。
手探りでユニットバスへ向かい、ドアを開くと蝋燭――というか大量のアロマキャンドルが橙色の優しい光と香りを放っていた。主催者の話では、バイト先が潰れたせいでアロマキャンドルが大量に手に入ったとのことである。
私は一つ手にとって吹き消した。煙はティッシュが水に溶けるように消えた。私はホッと溜息を吐いた。
やることはもう一つあった。洗面台の鏡を見ることである。恐る恐る覗くと、映ったのは眼鏡をかけた女の顔だった。
「……！」
私は絶叫を上げそうになったがグッとこらえた。どう悪あがきしようが変わりそうにない一重の眼は、神が造型を間違えたとしか思えない。顎の肉は弛み、端的に言えばデブである。髪はアップでまとめているが、何故かテカテカと黒光りして元来の肌の蒼白さと相俟ってもはや軟体動物の類という風情。そして見てくれの評価は初めから捨てて臨んでいるようなクマさんのダサいトレーナー。こんなものを着て外へ出るとは余程の勇者であろう。
なんのかんのと言ったが――然るにそれは紛れも無く私であった。

まさか私がこのような醜い女だったとは。そのうえでこのような性格を抱えているとなると、風呂場のカビにも劣る無価値生物ではないか。鏡などろくに見もしない生活が続いていたせいで忘れていたぜ。なんと怖い。これこそ一人時間差、認識のずれ。怪談の本質であることは読者諸君にも異論はあるまい。

九十九本のアロマキャンドルを尻目に参加者の待つ居間へと戻った。先程まで明るい部屋にいたせいで何も見えない。手探りで行くうち柔らかい二つのものに思わず触る。それが何かはわかったが、触られた本人が何も言わないので私も気づかなかったことにしてラブコメ展開を回避した。この話は腐ってもホラーなのである。

なんとか着席すると二話目が始まった。何かなかったか聞かれず若干の寂しさを感じる。

「じゃあ、次はあたしが話しますね」

高い女の声。先程、百物語を開始した声と同じである。

「福岡に有名な心霊スポット、犬鳴峠っていう場所があるんです。あたしホラ、百物語とかやるくらいですから。そういうの好きで、高校の時、友達と一緒に行ったんです。そこの犬鳴トンネルがやばいって話でした。今では新トンネルができてそっち通るばかりですけど、出るのは旧トンネルなんですね」

穏やかに紡がれる言葉は、黒い背景に吐き出されたとたん現実へ変化していく。

「行ってみると、入口は柵に囲まれて――立入禁止でした。電気もないし、ヤンキーがいても嫌ですし帰るかどうか相談してたら……柵の一部が壊れてるのに気付きました。誰かが策を壊して先に入り込んだ跡があるんです。あたしたちは三人。泥に残る真新しい足跡は一人か二人分。向きからして行きの分しかありませんでした」

声はそこで止んだ。擦れる音。何かを飲み下す音。テーブルの上でペットボトルと液体の音がした。

「物理的に危ないのは勘弁ですけど、その時は『あたしたちの他に

も見に来てる人がいるんだ、よかった』としか思いませんでしたね。まだ夕陽で明るい時刻でしたし。で、入っていきましたよ。犬鳴トンネルにはあるルールがあるんです。それは『手を余らせないこと』。一人で行く時は両手を握りしめて。二人で行く時は片手を繋いで、余った手を握りしめること。トンネルの中ではずっとそうしておかなくちゃいけないんです。あの世に引きずり込まれるとか何か持たされるとかそんな話がありました。で、三人ですからじゃんけんで勝ったあたしを真ん中にして手を繋ぎました。みんな怖いから真ん中に居たいんですけど、心霊写真なんかでも三人組の中央の子が何かされる確率が高いですよね……。そうだ。ちょっと今、手を繋いでもらってもいいですか？」

そう言って乾いた笑い声がした。誰かの吐息がやけに大きく聞こえた。唾を飲み込む音も。私は右手に冷たい手を受け、左手に大きな手を掴んだ。お互いに握り合うと怖さが消える。

「しっかりと手を持って真っ暗な所――今みたいに少しも先が見えない中を歩きました。水溜まりをパチャパチャ踏んで、かび臭さを我慢しながら進んでやっと抜けました。当然ですけど別に崩れて閉鎖になったわけではないので、通り抜ければ全然、道として使えるわけです。足跡だって一方向にしかなくても不思議じゃありません。ほっとして周りを見ると、端はガードレールもない崖です。ここから車が転落したという話をよく聞きます。『あれって……』。友達に肩を叩かれて振り向くと、崖っぷちで靴が揃えて置いてありました。あたしたちは怖くなって、誰かが走り出したのをきっかけに逃げ出しました。何も逃げることはなかったんですけど、置いていかれたくなくて必死に走りました」

暗闇から息切れが聞こえてくる。それは或いは自分のものかもしれなかった。繋いだ左手と右手はそれぞれ少しだけ汗に濡れていた。

「トンネルの半ばであたしたちはやっと落ち着いて、お互いに手を繋ぎました。なんで逃げるんだよ、なんて冗談を言い合いながらトンネルを出ました。いつも暮らしている雰囲気へ変わったのがわか

りました。その時、安心した皆がこう言ったんです。『ああ怖かった――あたし真ん中でよかった』」
空気が薄くなったように息苦しくなった。右手の先と左手の先は見えない。それまで信頼していた他人の手が急にそら恐ろしくなり――お互いに手を離した。
「じゃあ、蝋燭っていうかアロマキャンドルを消してきますね」
気配が動き、ドアを開けて出ていった。誰も何とはなしに足音に耳を傾けて黙る。
「次は誰が話しますか」
既に陽も落ちて何も見えないが、私は人がいるはずの場所に向けて話しかけた。
「あー。誰もいないなら俺が話すが」
低い声が返ってきた。

第二話を語った者――声からしておそらく女性――が帰ってきた。
「何かありました？」
「いや、ないですよ。まだ二本目じゃないですか」
クスクス。姿が見えずに笑い声だけ。チェシャ猫に会ったアリスはきっとこんな気分に違いないであろう。
「あー。次は俺が」
野太いくせにやる気のない声がする。
「俺は体質のせいで妙な奴に会うことが多いんだが……実家に帰った時、町で名前を呼ばれたんだ。振り向くと全然連絡をとらなくなってた小学校の知り合いだった。顔はわかっても名前が思い出せなかったんだが、とにかく話を合わせるまま喫茶店に入った。そこで思い出話に花が咲いてな。そのうち『悪者』って呼ばれてた奴の話になった。俺は頑張ってこどもの頃の記憶を掘り起こしてたんだが――なあ、こどもの頃の記憶ってよく美化されるよな」
返事はなかったが、構わん続けろ、と場から聞こえない声がした。
「思い出補正って言葉があるくらいで、俺が大好きだった場所も今

見ると何が良かったのかわからんドブ川だったりするんだ。人に聞いても昔からそうだったらしくてな。で、もしかして『こどもの頃の自分』ってのもそんなもんで、わりとマトモに、平凡にテキトーに生きてきたと自分では思っててもも忘れてるだけで――最悪のドブ川だったりしてなって思うんだ」

低い声は嬉しそうにでもなく、悲しそうにでもなく、ただ淡々と吐き出された。

「小学生の時、俺はわりと田舎の方に住んでたんだ。で、そこのクラスに『悪者』がいた。どこの学校にも一人はいるような典型的な『悪者』。父親が酒飲んで町でよく暴れて、母親がそれを止めようとして殴られて入院とか。よく大人が噂してたから今考えると可哀相な奴だったのかもしれん」

数年経って改めて考えるとわかるのはよくあることだ。

「でも悪いものは悪い。俺だって原付に乗ったそいつに轢かれかけたしな。『悪者』は金を脅し取るなんてよくやってたし、すぐ殴るし、煙草の火を目に押し付けられて失明寸前になった奴もいた。学年が上がるごとに手がつけられなくなって皆が迷惑してたんだ。全員にもれなく嫌われて『死ねばいいのに』って、陰では皆そう言ってた。それでも先生が動かないのは、そいつの飲んだくれオヤジが極道と関係があったからなんだ」

金太郎アメみたいにどこを切っても周囲に迷惑をかけまくる奴らである。くたばればいい。

「小六の冬だ。俺と友人は『悪者』を懲らしめてやることにしたんだ。学校の裏山に呼び出す手紙を女子に書いてもらって、二日かけて落とし穴を掘った。クラスの皆の応援を受けた俺たちはなんだかヒーローみたいな気分だった。正体がバレないようにビニール袋に目の穴を空けて被ると、完全に正義の味方だと思い込んだ」

誰も何も言わなかった。呼吸音さえしない。

「のこのこやってきた『悪者』を後ろから突き飛ばし、作った穴に落とした。深さは二メートル半くらいかな……傍にある木に結んだ

ロープがなくちゃ、俺たちも上がれないくらいだった。姿を見られないよう、すぐにスノコを穴に被せた。泣き叫ぶ『悪者』の声を聞いて、ビニール袋を被った俺たちはお互いに手を叩いて笑った。一晩反省させてやろうって、そのまま家に帰ったんだ」

白い袋を被った正義の人々……ＫＫＫのようだ。

「でも俺はテレビの天気予報を見てたらやっぱり気になって、夜に一人で様子を見に行ったんだ。もう雪がちらついてた。『悪者』はかなり弱ってた。それで俺は『もう迷惑かけないか、もう悪いことしないか』って言った。『悪者』は泣いてずっと謝ってた。それで出してやった。俺の地元は冬にはかなり雪が降るからよ、その晩に出さなかったら危なかった。で、俺は卒業して中学は皆と別んところに行ったからさ、『悪者』に関しちゃそんな記憶だ」

誰ともなくほっと息を吐いた。

「ところがさっきの、小学校の知り合いが――たぶん一緒に穴掘った奴だと思うんだが――おかしなことを言うんだ。『あいつ、あれから行方不明なんだよな』って。『積雪で三月まで捜索できなくて、そのうちなし崩しにあいつのオヤジと母親はどっか逃げて、それっきり』って。それで俺の顔見て言うんだよ。『お前、出してやったって言ってたな……？』。俺は頷いた。だって俺の記憶じゃ、ちゃんと出してやったんだよ。『まあ、どうなってたとしても今から確認するのもアレだけどよ……』ってそいつは言った。俺は『まあああ……』って言って別れたよ。俺の記憶違いか、そいつの記憶違いかわからんが、まあ皆最悪のドブ川みたいなことやってるかもなってことだ」

彼はゆっくりと立って、見えないはずだが全員の顔を見回しているようだった。それからアロマキャンドルを消すため部屋を出ていった。あまりにも後味が悪く、地蔵のように全員が口を閉ざした。

私はいたたまれなくなり、次の語り手は誰か尋ねた。そもそも何人で参加していたかおぼつかないので、どんどん自分から話してもらうしかないのである。まだ話していないのは誰かとざわつき始め

た頃、正面から声が聞こえた。
「ほな、次おれが話します」

それなら。
そんなら。
ほんなら。
ほなら。
ほな。
ほな、とはつまり「それなら」の意であることは賢明な読者諸君なら知っていよう私はわざわざ方言辞典を引っ張り出して調べてしまったが。
第三話を語った低い声の男が帰ってきた。誰かとぶつかったらしく、「おー、悪い……」と間延びした声が聞こえた。
「ほなおれですね」
今までに話してきた者とは若干違うイントネーションが、ぽつりぽつりと様子を伺うように話し出した。
――おれの実家は田舎なんですけど。昔っからたぬきが有名で何でもたぬきのせいにするんです。ぬりかべも狐火も。狐火がたぬきってどういうことだっておもうでしょがそんなん安直に変えますよ。たぬき火ってな。地元の若い奴はそうでもないですけど、じいちゃんばあちゃんらはたぬきが化かすって今でも本気で言いますから。
最近はもう携帯ばっかりですけど、そん時は電話ボックスがたくさんありました。今でも大学に一応ありますけど。で、実家の近く、気色悪い電話ボックスが田んぼだらけの道に一つぽつんてあったんです。
小さい時から友達の間で有名で、えらい怖いなあっておもっとったんですけどね。
あれは中学生くらいやったかなあ、なんでああなったか詳しいことは覚えとらんのですけど、塾の居残りか出かけた帰りか――夜遅くにあの近くをたまたま通って。

ここらとは比べもんにならん田舎ですから、何するにも車がいるんですよ。やで、いつも家に電話かけて迎えに来てもらうんです。そうせんかったらそこから三十分くらい歩き通しですから。

ほら、手入れしてない――藻の生えた水槽ってありますよね。ザリガニとか飼ってたけど皆そのコトを忘れてしまって藻だらけで中がおぼろげにしか見えんやつ。そんな感じのえらい汚い電話ボックスでした。

躊躇しましたけど、もう腹は減ってるしくたくたで、結局入りました。昼間にもらったパンをかじりながら電話かけると、すぐに親が出ました。電話ボックスのある場所なんか限られててすぐわかるんで、もう親もいつものことやってわかって一言で済むんです。

「迎えに来て」

受話器をおろす。

瞬間、外に黒い影が二、三人出てきて、ガムテープでボックスごとグルグル巻きにしだしたんです。おれは何が起こっとるんかわからんで動けんかったんです。

ハッとして開けようとしてもびくともせんで。そのうちぼろぼろの服着た一人が画用紙を取り出して俺に見せた。そこに汚い字でこんな風に書いてありました。

おかねくだちい？　ごはんも？

ことばがうまくできないみたいでした。おれ、笑えばいいのか迷ったけどそいつら目が真剣で。おれのぞうりが濡れてきてるのに気づいたら、なんか別の奴が透明な液体を電話ボックスの足元に流し込んでました。

臭いを嗅いだ時、やばいってことが初めて理解できて。その液体、ガソリンだったんですよ。んで目の前の奴はライターにカシュッて火を点けてた。

大慌てで財布と食いかけのパンを下から通して渡したら、そいつ

らえらい速さで田んぼに消えてったんです。おらんなってから想像力が働いて怖くなりました。中からガムテープをハサミで切って出ましたけど、少しでも明るいところに行きたくて自販機の前にいたら実家の車が来ましたよ。

家に帰って、ばあちゃんと親になんべんも死ぬところだったって言っても信じてくれませんでした。

「たぬきやろ。死なん死なん」

って一言で片付けられて。

しばらくしたら電話ボックスも取り壊されて、おれも何回もたぬきたぬき言われてなんとなくそんな気になってましたけど。

ある時、ニュース見てたら実家近くの山が出てきて、そこで密入国者が捕まったって。田んぼばっかの人通りが少ない道で強盗をしてた。死体が三人埋められて、それが動物に食い散らかされた跡があったんだと。

やっぱあれは人間の仕業やったんや。

そのことを言ったら、ばあちゃんはお茶を飲んで渋い顔をした。で、呟いた。

「危なかったなあ……あの人らも、たぬきに操られとったんやなあ」

どこまでたぬきにする気やって思いますよ。

私は爪の先で頬を掻いた。たぬきの男は立ち上がって四つ目の蝋燭を消しに向かった。洗面台の鏡に映った彼の姿は――いや、暗闇でわからないだけで今まさにそうかもしれないが――たぬきかもしれぬ。そういうのも「怖い」。

次は誰が語るのか、いっこうに名乗り出ない。もしかして一周してしまったのか。私が行こうか。しかしあまりがっつくように怪談を牙式連発銃の如く繰り出すのはいかがなものか。ネタ切れで後半黙っているだけとなるのは寂しい。

百物語は計画的に、である。私は計画を考えるのが好きな計画的な人間である。時には計画を練りに練りすぎて石橋を叩き壊すよう

に破綻させてもやぶさかではないという、計画に全力を尽くす計画道を極めた計画王である。
そこで私はかねてから頭に釣り針のように引っ掛かっている一つの疑問を口にした。
「あの……これって九十九話でやめるんですかね」
口ぶりと仕切りっぷりからおそらく主催者であろう、第二話を語った女性へ聞いた。
「ええ、百物語は本当に危ない儀式ですから。大丈夫、九十九話でもけっこう怖いことは起きるみたいです」
それならば問題はない……問題があるとすれば私の方であった。

百物語を始めてまだ四話が語られた段階であるが、困ったことに私は早くもある現象に遭遇していた！
なんというかなんといえばいいのかむしろもう言うなと怒られそうで申し訳ないけれども――飽きた。
私の飽きっぽさは我ながらあっぱれというもので、食事をとりながら飽きて本を読みだして飽きてテレビをつけて飽きて音楽を聴いて飽きて食事に以下略といったことが日常茶飯事である。一時期自殺を考えていたがそれにも飽きて部屋の中央には今でも首吊りロープがぶら下がっている。ある日片付けようとして、首をかける輪の部分を解いたところで飽きてそのまま何の変哲もないロープが垂れているだけとなりもはや何のことやらわけがわからない。
……というのは嘘だが、こんな脇道に逸れたくなるほどもう飽きあきだというのは真実である。こうして妄想で時間を潰しているうちに既に六十話近くまで来ているが、もう一つ一つの違いなどというものは思い出せない。
なにせ怪談というのはパターンだらけなのである。怪異が起こる場所もたいてい決まっている。
神社・トンネル・トイレ・山・海・宿泊施設・ボロアパート・廃墟など。

そこにいわくや禁忌や儀式を足す。
自殺の名所・〜の怨霊・そこに代々伝わるアイテム・「〜してはいけない」・「〜すると〜が起きる」など。
最後は「おまえだ」などのビックリ要素か、ちょっと考えると意味がわかって背筋が寒くなるオチを入れておく。スパイスとして地元の場所を舞台にしてもいい。データベースだけ集めて、まるで自動生成ソフトでも作れそうな勢いだ。既に怪談をある程度収集してきた私の耳には聞き慣れたフレーズばかりで困ってしまう。自分の話でもそうなってしまうし、私は自分で話す怪談を自分で怖がるようなアホでもないので何一つ楽しめない。
そこで。
怪談を繰り出しながら私は考えた。
一つ「ずらす」のである。
「——たすけて、たすけて、たすけて、たすけてってびっしり書かれてたんです」
ありきたりな六十一話目を語り終え、私は早々にアロマキャンドルの間へと向かう。
私が欲しいのは予想外にして確実な恐怖。予定調和に「ああ怖かったねえ。何か起きてたのかな？　ひどいこと起きなくて良かった良かった。解散！」では残念至極の噴飯モノである。
私は用意された九十九本のうち、半分以上が消えた蝋燭の群れを見つめる。メンバーの中には、律儀に毎回正確に数えて消している者がいるだろうか？
話している数と蝋燭が一つズレていることに気づく者がいるだろうか？　否、である。
洗面台の鏡には、不気味にほくそ笑んだ女の顔が浮かぶ。低い声で呟いた。
「これは百物語だしねえ……」
私は六十一話目の火を消さずに戻った。これで黙っていれば、終了予定の九十九話を語り終えた時点でまだ一本だけ火のついた蝋燭

が残ることになる。語られた怪談の数を正確に覚えている者はいない。いたとしても一つ違うくらいなら自分の間違いだと思うだろう。しかし一話違えば九十九物語が百物語に変わるのである。それも私以外は九十九話と思い込んだ状態で。

俄然楽しくなってきた。私は戻って座った。既にネタ切れした者が出ているので語り手は挙手制となった。私は嬉々として怪談を口から垂れ流す。一人が連続で語ることで場の怪談数を曖昧な状態にし、蝋燭から逆算しなければならなくした。

そうしながら脳内では真の数をカウントしていった。正直こんなことにだけ集中して頭の回転が速くなるのはいかがなものだと思うし、常に今のような状態でいられたならば既に私は賢者にでも転職しているのではあるまいか。

いや可能性の現在を考えるのはよそう。今の私を全力で肯定するのだ。私は怪談で他人を騙すのが好きな女でありさらに見た目も酷い。ええいそれがどうした鏡なんか二度と見るつもりはないぞ私は。

そしてとうとう私は脳内カウントで九十九話を語り終えて立ちあがる。残りの蝋燭は今から消す分と真の百話の分で二本のはずである。しかしユニットバスの部屋に来た私を待ち受けていたのは。

「九十九、百、百一話……？」

残り「三本」のゆらめく蝋燭であった。

小さな火が踊るように私の影を伸縮させる。百物語開始時に比べればユニットバスの部屋はかなり暗い。なにせ火のついた蝋燭は九十九本から三本になっているのだ。

「とりあえず一本は消すか……」

アロマキャンドルを一本手にとると、蝋燭に見立てた命の灯を消す落語を思い出した。サゲでは主人公がうっかり自分の命を吹き消してしまうのである。私はじっと火を見つめる。

――フッ。

アロマキャンドルの煙は空気に馴染んで消えた。負けぬ。怖いと

思えば何だって怖いのである。これは低い声の男が先程言っていた言葉だ。
私は手に滲んだ汗をトレーナーで拭いた。残り二本。既に実際の話数は九十九話まで終わっている。しかし蝋燭の数を反映すれば百一話で終わり。これをどう考えるか。
あのメンバーの中にお茶目な人間がおり、私と同じように百物語にしてやろうとずらしたに違いない。私は鏡を見て聞く。
――そうだよね？
――うん。
溢れださんばかりの知性がオーラとして放出されている女が頷いた。
「さあ、残り二本ですよ。九十八話目は誰がいきますか」
私は何事もなかったように戻って再開した。広く世間に認知された百物語であっても、百一物語というのはとんと聞いたことがない。百話で怪異が起こるのであれば、百一話ではもう一つぐらい怪異をサービスしてくれるのではなかろうか。
期待を込めて私は深呼吸する。こだまするように、闇の中にもう一つ誰かの深呼吸が聞こえる。
次はいよいよ待ちに待った百話目である。それを知っているのは恐らくずらした私と――もう一人の「誰か」だけである。
「じゃああたしが九十八番目を。九十九番目は嫌ですからね……」
右側から女性の声。主催者である。
「何にしようかな。そうだ、百一物語って聞いたことありますか」
口に何か含んでいたら私はきっと噴き出していたであろう。懸命にリアクションを抑えて沈黙した。誰も発言しない。気のせいかもしれないが主催者の視線が暗闇を突き破って私を監視しているようで、思わず俯く。
「あれ。皆さん知りませんか。誰か一人くらいは知ってると思ったんですけど」
そうして主催者は語りはじめた。

「百物語がどうして百なのかというとですね、百鬼夜行みたく、『百』はたくさんのものを表すからなんですね。じゃどうして『百』はたくさんなのか。それは桁が変わって次の呼び名に移るからです。一から十、十から百、兆から京、那由他から不可思議と、一つのコップの水が限界を超えて溢れ出すイメージが『たくさん』の意味するところです。狭い場所・短時間で多数の怪談を語って怪異を呼び込む。やがて怪異は一定量を超え、こちらがわに溢れ出してくる。大事なのは九十九から百への瞬間です。普通に蝋燭を百本用意して百話語っても、たいていは何も起きません。それはまだ『百』というコップの中におさまっていますからね。だから今回、あたしは――九十九本の蝋燭――『九十九』というコップを用意したんですよ」

冷房が至近距離にあるように、背筋がひんやりする。夜も更けて気温が下がったせいに違いない。

「用意した蝋燭は九十九本なのに、何故か一本増えていて百話語ってしまう。それが本当の百物語。そして百一物語っていうのはそこから更に一話語り足すわけです。それはもう『百物語』ではない。怪異を呼び出した『百物語』をわざわざ『百一』にずらして破壊するんですから」

これは私へのあてこすりだろうか。主催者は全てを知っていてこの話をしているのだろうか。

「昔から百一番目は誰が語ろうがどうしても同じ話になるそうです。その場に集まった人達に関する『ずれ』って話なんですけど、とにかく後味が悪い。すぐには息ができなくなるほど怖い。得体のしれない不気味さを湛え、アイデンティティの『ずれ』に精神が耐え切れずに――ぷつん、となる人が出る」

暗い場所に糸の切れた操り人形が浮かぶ。妄想であるが、それは無機質な青い目で私を見ていた。やめろ。百一話を語ることになったのは私のせいではない。もう一人の「誰か」のせいだ。

「大丈夫ですよー。今回はたとえ一本増えたところで百本。通常の百物語になるだけですからねえ。それじゃ九十八話はこれで終わり

ます」
主催者はあくまで明るく静かな声だった。席を立ち、ごそごそときぬ擦れの音がしてドアが開き足音が遠ざかる。
再びドアが開いた時、柑橘系の香りが鼻をくすぐった。アロマキャンドルを一本持った黒髪の女が部屋に入ってきた。背が低く色が白い。眼鏡をかけている。
どうやらこれが主催者の顔らしい。
「最後の一本なんで、ここで消しましょうか」
そう言って中央のテーブルに置いた。今まで語っていたメンバーは火に照らされて、オレンジ色と影のコントラスト顔を披露している。
正面のたぬき男は幼さを残した垂れ目がちの顔であった。左側にいる低い声の男は――医者が十人いれば八人は「死んでいる」と診断するに違いない。残る二人は「ゾンビ」と診断するであろう。
「じゃあ九十九話を……どなたが」
突然、風もないのに蝋燭が消えた。酷い腹痛が始まる前触れのように、内臓に嫌な感じが渦巻いた。
ピン……ポォーン。
インターフォンが鳴った。
ピンポンピンポォーン。
執拗に何度も押してドアを叩いている。もう深夜のはずだ。ろくな人間ではあるまい。それが人間であればの話であるが。家主である主催者は出るべきか迷っているようだった。
「これは出なくても……いいですよね」
メンバーに尋ねた。全員が無言で頷くのがわかった。しかし主催者は、言葉とは裏腹に玄関へ向かった。静かになる。一瞬何をしているのかわからなかったが、どうやらドアスコープを覗いているらしい。読者諸君、見よ。あれが真のオカルト者の姿である。諸君にはできるだろうか私にはできない。
それからそっと部屋に戻ってきて呟いた。

「まだ九十八話のはずなのにな……」
百話目の怪異。
叩かれるドアの音を聞きながら、私はそう言いたくなるのを堪えた。
「ドアの外、誰かいたんですか」
主催者は柳が枝垂れるように俯いた。
「『誰か』っていうか……『何か』」
カパ。
玄関ドアの郵便受けが開かれた。居間のドアは閉じられていて確認できないが、恐らく室内を覗いている。目玉が動く。全員が微動だにせず息を潜めた。
主催者が、あの……と小声で話し出す。
「皆さんに聞きたいんですけど。ウチに最後に来たのは誰ですか？あたし、よくわからなくて」
真っ黒い沈黙。
「俺は一番に来たが」
「私は二番目かな、誰がいたかあんまり覚えてないですけども」
「ほな、おれかな？」
たぬきの男が言う。
「鍵、かけました？」
主催者の強い口調に、彼は戸惑った。
「や、いや、閉めたと思うけど……」
――カチャリ、バタン。
玄関ドアを開けて「何か」が入ってきた。ゆっくり、とすんとすんと音が響き、居間の閉じたドアで立ち止まった。自分の鼓動が重低音ドラムのようである。
と、目の前が真っ白になった。私は死んだ、などという気分もそこそこに突然室内灯が点いたのであった。後ろ頭をかきながら、間延びした声の女性が入ってきた。

「……ごめんよー」
主催者以外の全員が、部屋の隅で団子になっていた。低い声の男などは携帯を開いて警察に電話するところであった。

明るい部屋はよくよく見れば可愛い人形もゲーム機も洗濯物もあり人間が住んでいると言われれば納得しかできないようなごく普通の部屋だった。落ち着いて話を聞けば、主催者と新登場の女性――猫鳴（ネコナキ）さんによる「サプライズ」であった。
主催者は蝋燭が一本になった時点で、こっそり蝋燭の間で彼女に連絡した。続いてドアスコープを覗く時にそっと鍵を開ける。そして怖がらせながら現在に至る。「百話目の怪異」は彼女らに造られたものだった。
「ごめんよーごめんよー」
猫鳴さんはしきりに謝っている。対して元凶の主催者は「幽霊じゃなくてよかったでしょ？」とうすら笑いを浮かべた。眼鏡の奥の開き直った瞳を見て、何も言えなかった。
「でも、あのタイミングで蝋燭が消えたのは神懸かってたでしょ？皆の目を盗んで消すの大変だったし」
主催者はにこやかに言う。たぬきの男もつられて笑顔になった。一同は胸を撫で下ろしているが、私はこのエンディングに納得がいかない。
これでは何も起きていないのと同じではないか。読者諸君も、もっと何かないのかお前ら酷い目に遭えふざけるな死ねと言いたいところであろう。やめろ、物を投げるんじゃあない。
「なあ、えーと……なあ？　お前さんよ」
妄想に浸っていると、低い声の男――他のメンバーにはN氏と呼ばれている――が私の肩を叩いた。そういえばお互いに名も知らぬ仲である。
「お前だけずれてる……」
何のことかわからない。先程もみくちゃになった際にずれたブラ

のことを言っているのか、空気が読めないことを言っているのか。どちらにしろ失礼なやつである。
「お前、誰なんだよ」
室内が静まりかえっていた。全員が私たちを注視している。私が誰であるか？
そんな抽象的なことを言われてもわからない。しかしN氏は続ける。
「なあ、この中で『彼女』を覚えてる奴いるか」
メンバーは黙った。顔を覗き込むが、直視に堪え難いものでもそこにあるかのように目を逸らしてしまう。いてはいけない者がいるように。
何だこれは単なるいじめではないか。白人の子供達に地図を見せ、黒人の一家が住む地区を指して「何がありますか」と尋ねたら「ここには何もありません」と返ってきたとかいうアレではないか。
「私は初めからここにいましたよ！」
「いや、いたんだよな。たぶん。ただ、ずれてんだ。学生証を見せてくれ」
N氏は違和感を感じているが、具体的に何がどうとは言えないようである。まるで四次元間違い探しのようなもので、もどかしい。眉間に寄ったシワは必死さの現れだった。私は死人のような彼の、そこを信じることにした。
学生証を取り出してみる。私の指は何故こんなに震えているのだろう。歯の根鳴るな。
「これだな……仕方ねーな」
N氏に手を引かれユニットバスへ向かう。他のメンバーは怪訝な顔つきで私を見た。何故か私は笑ってしまう。
背中を押されて洗面台の前へ。暗闇の下、鏡を眺める。「女」がいる。N氏が明かりを点けた。暗闇は消滅し、眩しい光が辺りを照らした。
そこには「男」がいた。眼鏡はかけているが、トレーナーは着て

いない。焦げ茶のジャケット、薄手のシャツにジーパン。ヒゲを剃り忘れてうっすらと顎が黒い。
「あ、私……だ」
気がつくと実物の方もそうなっていた。そう。これが本来の「私」なのである。何故わからなかったのか、何故思い出せなかったのかわからない。「ずれて」いたのだ。
「これが百話目の怪異か。気をつけろよ」
N氏が呟き、先に居間へ戻っていく。具体的に何をどう気をつければいいのかは言わないまま。
続けてユニットバスを出ると、N氏以外の全員は「何事も起きていない」ことになっていた。私が女性だったことを覚えていない。ずれが元に戻ったのだろうけれども、孤独を感じる。今夜の経験を彼らにいかに語ったところで、そんなもの彼らにしてみれば無かったことになっているのだ。
……ただ一人、頬のこけた死相の男――N氏を除いて。
主催者と猫鳴さんが冷蔵庫から、人数分の高級そうなお菓子を持ってきてくれた。N氏の分だけがなかった。確かに運の悪そうな顔つきである。
「食べる？」
目配せして私は自分のケイク・ド・ショコラを半分差し出した。
「いや、甘いものは嫌いだからいい」
いいから食え、とN氏の口に押し込んだ。私たちは談笑しながらお茶とともに流し込み、カーテンの隙間から朝陽が洩れ出てくるのを見た。
それから白んでいく群青色の空の下で、解散した。去っていく人々の背中は満足気で結構だけれども、私には一つの違和感――「ずれ」がそこにあった。
百一話目の怪異について。主催者が「百話目」を語った。それから私が変化しているという「百話目の怪異」の登場、そしてそのことをN氏が指摘するという「百一話」。今はこの時点のはずで「百

一話目の怪異」がまだ起こっていないのである。或いは既に起こっていて気づかないのか。

本当は百話目の時点で起こったであろう怪異「性別の変化」でさえ、私の記憶は改竄され最初から女性であったかのように思い出すし、語る際には奇妙なことにそうなってしまう。現在が過去を変えてしまっている。私というフィルターを介して語る限り、起こった時点は関係ないのである。問題の中心は「ずれ」に気づくかどうかである。

そこで考えてみてほしい。

主催者側が参加者数を確認し、一人ずつに用意されたはずであるケーキの数が「一人分」足りていなかった。フォークと皿の数も、開始当初に出されたペットボトル入りのお茶の数さえ。私は百物語を始める前の状態を必死に思い出すが「本当は」誰がそこにいて、誰がそこにいなかったのか、霞がかったようにぼんやりとしているのである。よくあるだろう――考えてみれば一人増えていたという怪談が。二話目、暗闇で私が左手を繋いだ彼は何者だったのか。

帰り際に確認すると、彼以外のメンバーはペットボトルを持っていた。周囲は彼のことをN氏と呼んでいるが、果たして本名を知っているのか？　以前から知っているような気がするが、彼は一体誰の知り合いだ？　顔見知りだけでやっているはずの、この百物語全体に漂う妙なよそよそしさは何だ？

N氏こそが「ずれ」。

百一話の怪異。

増えた一人。

元々は存在しない人間。

本人が関知しているかどうかはともかくとして。

何が「お前だけずれてる……」か。お前こそずれているのだ。しかし私はずれを正して――たとえば戸籍や証拠を集めて――N氏を「なかったこと」にはしない。このまま黙っていることにする。

N氏はただのいい奴であり私のずれを正してくれた恩人だからと

いうのは嘘で、当然そちらの方が「面白い」からである。

――そして認識しうる限りの記憶上では、これがN氏との縁の始まりであった。

百物語（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
よろしければ感想などお願いします。

料理されるもの騒動

何事も先達はあらまほしきことなりと言うもので、とりわけ悪魔の毒々マッシュルームとしか形容できないキノコやＴＨＥ・ＺＯＵＭＯＴＳＵことホヤを最初に喰った奴は偉いのである。たとえ死んでしまおうとも、だ。

そこには恐怖を理性で押し殺す人間賛歌がある――と良かったのに。

さて怖いと思えば何だって怖いものであるが今回、何が怖いかって飢餓状態。人は衣食住足りて礼節を知るという。とはいえ衣や住がなくともすぐ死ぬわけではない。とにかく第一に食がなければ話にならないのである。

先日バニシュデスで消滅したＮ氏という男がいる。私はこの哀れなる男と行動をともにすることが多かった。何故かと問われればそこに摩訶不思議な現象が常にあったからと答えよう。この世には期せずして霊障の渦に巻かれる不幸な人間がいるものであり、その渦を好んで覗きこみたがるメシウマ人間もまたいるものなのだ。

某月某日、私はＮ氏の部屋に寄生していた。腹が減り過ぎて寝るに寝られず、のそのそと這いおきる。

炊飯器を何度覗きこもうと、そこには空虚な穴があるのみであった。私は何度そこへ哀願に似た期待を投げ込んだか知れない。冷蔵庫にはカビた玉葱と賞味期限を確認するのさえ恐ろしい牛乳。私は冷蔵庫の扉を閉じながら、Ｎ氏を見る。

「お腹、空かないかい」

彼は例によってクマのある目で育成シミュレーションゲームをしこしこ行っていた。

「空いてる」

「ご飯無いの」

「無いな」

「どうして無いんだい」
「買ってないからだ」
「どうして買ってないんだい」
「それは金がないからだな」
「どうして金がないんだい」
「働かないからだ」
「どうして働かないんだい」
そこでN氏はへの字口になり、お前こそどうなんだと言う。
「それは……」
私は目を逸らし、窓の外を行くミツバチを見た。働きバチは忙しそうにブーンブンシャカビガッビガッと飛び回り、「お前ら働けガンバンベ」と叫んでいるように思えたので再び目を逸らしてN氏と向き合った。
「……働きたくないでござる」
思わず漏れた言葉は最低なものかもしれなかったが、N氏と私、一字一句同じ言葉を同じタイミングで発した者同士の奇妙な連帯感というかただの馴れ合いが生まれた。
数十分後、我々はキャベツ畑にいた。一面に広がる瑞々しいグリーンボール。整然と並び、さあ食べろと言わんばかりである。
「今年は豊作すぎて、農家は値崩れを起こさないようにキャベツを潰してるんだよ。一つ二つもらったところで気づかないさ。頭いいでしょ」
「――お前最近、もやしもん読んだろ」
N氏を無視して続ける。
「まあ基本的にいらないものだから店頭のに比べると歪なものが多いけど、そこは吟味すれば限りなく良いものが手に入る。言っておくけど法律上は完全にアウトです」
私は持参したエコバッグにどれを入れるか、数分間ためつすがめつした。N氏も丹念に見ていく。結果、明らかに他のものとは異質の――『快感フレーズ』にラオウが出ているような――凶悪なまで

に柔らかな葉が厚く重なっている、破壊的に旨そうなものを見つけた。
「おいこれ旨そうじゃね？」
N氏が収穫しようと手を伸ばす。瞬間、彼の顔が緑色になった。いよいよ顔色の悪さも歯止めが効かなくなったのか――否、キャベツが割れ広がり顔に食いついていたのである。
彼はパニック状態で顔からそれを引きはがそうとしたが、足元のキャベツに躓いて転んだ。その拍子に足がつったらしくゴロゴロとのたうちまわっている。
……これは後で聞いた話だが、彼はこの時、小さく木琴じみた奇妙な鳴き声を聞いたという。
それは、或は私の声かもしれなかった――というのも彼がキャベツに襲われて呻いている様は私のツボを刺激して大爆笑だったからである。
しかしこのキャベツがまさかあんなことになろうとは、この時点では誰にもわからなかった。

甲高い怒声が響いた。
「きさんら、何しとん！」
麦わら帽にゴム長姿の娘が走ってやってくる。どすどすと一歩進むごとに黒い三つ編みが揺れる。
「やばい、見つかった！　逃げ――」
N氏を見るとまだ顔を押さえてジタバタしていた。キャベツの間から片目で切なく私を見ている。
「ええッそんな！　自分には構わず行ってくれって？　カッコイイよN氏、カッコよすぎるでヤンス～ッ！　ばいばいN氏。今になって思えば奇妙な友情すら感じるよ……」
私はむぐむぐと呻くN氏を置いて一人で走り出した。背中に恨みがましい視線が突き刺さる。あいつ……あの目……。

「このいかれキャベツがッ！　ぶちまわすど」
麦わら娘はN氏にへばり付いていたものを無理矢理剥がした。途端にキャベツは泡立った後、複数の目を持つ生物へと変化し、林の中へと逃げていった。
溜息を一つ吐いて、褐色の肌をした娘はうってかわって穏やかな表情になった。
「大丈夫かの」
我々を助けてくれたらしい。なんといい人だ。
「ああ、大丈夫です。N氏はこういうの慣れてますから」
N氏を見た娘は突然ムンクの叫びのようなポーズで絶叫した。いちいち声とリアクションが巨大である。
「ああッ！　ぶちひどい顔色じゃあ……ここまでやられた人は初めてじゃ。見てみんさい、頬がこけて――ほとんど死人じゃ」
「ええ、私も彼が気の毒でなりません。でもまあ、いつも通りですからお構いなく」
とはいえ問答の末、ウチで休んでいけと言われて飯まで出されれば従うのにやぶさかではない私である。畳に寝かされたN氏を尻目に、私はオクラと納豆とシソのぶっかけそうめんをとぅるるんと頂く。
「うまい？　母さんのならうまいんじゃけど、今おらんけ我慢してな」
娘が繰り出す屈託のない笑顔に目を背けつつ、キャベツに擬態していたものについて話す。
「……ということは、この辺りには昔からいたのでしょうか。その――ええと、てけてけとかいうのは」
「ん。夜な夜なキャベツを盗ってく。見つかるとキャベツに化けて隠れるんじゃ。ウチはこの辺りの警備担当で岩手メンコイ」
張り出した胸に輝く名札があった。安っぽい。メンコさんと呼ぶこと、と書いてある。
「今年は豊作じゃけど、その分だけ盗ってくつもりじゃろうなあ」
「農家の方が作った大事なものを盗ろうなんて、図々しいやつらで

すね」
寝ているN氏が眉間にシワを寄せて呻いた。何か言いたげである。
「退治したいんじゃが、よくわからんでの」
そう言って麦茶を飲み干していく。首に汗が一筋、線を引く。
「あの……さっきから『盗っていく』と仰ってますが。奴らは巣かなにかあって、そこに持って帰ってるんですかね」
「さあ。どうじゃろ」
娘は心底興味なさそうに鼻をほじりだした。キャベツを守りたい気持ちはあるのだろうが、それにしてもこちらが心配になるほどダイナミックかつスリリングなほじり様である。鼻のほじり方には大別して二種類ある。一つは指先で掻き出すタイプ。こちらは奥に潜んだブツまで捕えることができるが同時に粘膜を傷つけてしまう可能性の高いリスキーなほじり方である。時限装置の解除並の慎重さが必要とされる。もう一つはねじるタイプである。こちらはより安全度が高く鼻孔入口付近を満遍なく攻めることができる。しかし奥までは狙えないもどかしさ。そしてどの指を使うかというのも問題である。今彼女は一般的であろう人差し指を使っているが小指というのもそれはそれで趣深い。中には親指を使う猛者もいるがあれは入口付近しかとれないうえ穴が拡張される可能性も孕んでいるので注意されたい。長々と何が言いたいかというと、つまり彼女は私の話ないし奴らの生態については全くどうでもいいらしい。
「……じゃあとにかく、尾けてみますか！」
とメンコさんを見ると、鼻血を出していておおわらわであった。N氏は混乱した彼女にあちこち踏まれてもはや虫の息である。ただ幸いなのは意識がないことだった。

N氏が肘やら腰やらを不審げに確かめる。
「なーんか顔しかやられてないはずなのに体中がいてえんだよな……」

キャベツ畑でつかまえて。我々はマグマめいた夕陽の下、キャベツを見張っていた。N氏は痣だらけの満身創痍である。
「きっとてけてけに神経毒か何かを注入されたんだよ」
「おい、洒落にならんことを言うな」
こうまでN氏が不審に思っているのに黙秘し続けるメンコさんはいい性格をしている。
「で、なんであの人は鼻血出してんだ」
……鼻にティッシュを詰めたままのポーカーフェイスは決まらないものである。
「しっ。もう来とんよ」
泡立つ苔色の化け物が不快な音を立ててやってきた。身長は成人男性と同程度である。キャベツの前で静止して数秒、全身の目玉がキョロキョロと周囲を見張る。
我々は息を殺して緊張していた。しかしシリアス顔のメンコさんの鼻にあるティッシュ――見れば見るほど妙に気になってくる。腹筋が震える。
限界に達しようとした頃――てけてけは腹のあたりに線が入って横に裂け、ぱっくりと開いた大口にキャベツを放り込み始めた。
私は苛立ちだすメンコさんの腕を掴んで抑えた。
やがててけてけは大胆にも十数個のキャベツを飲み込んで林へ帰っていく。我々は粘液の張り付いてキラキラ光る道を追っていった。
後をついていくうち、妙な威圧感のある場所へと導かれていた。すでに陽はとっぷりと暮れ、携帯電話の光を頼りに苔むした穴ぐらを進む。我々はたちこめる生臭さに顔をしかめた。嗅覚が役立たずのメンコさんは別として。
穴ぐらは次第に天井が低くなり息苦しさを伴ってくる。しっとりと濡れた内壁は巨大生物の体内のようである。
立って歩くことすらままならなくなり、這う。N氏を先頭に、メンコさん、私の順である。メンコさんの尻が私の目前わずか数十センチに鎮座ましましているのがわかる。ただ、全く見ようとは思わ

なかった。
ふと脇を見れば壁画が延々と続いている。それは多くの目玉を持つ、てけてけの姿であった。
やがて道は広がり、穴が眼下にあった。一人がやっと通ることのできる程度の直径。
「道は他にないし……降りるしかないね」
「待て待て、どのくらいの深さかわからんぞ」
手を差し入れても届かない。携帯のライトでも照らし出せない。考えこんでいると、摩擦音とともにメンコさんの顔が突然暗闇に浮かびあがった。ライターを持っていたらしい。
「これで火ィつけたんを落としたらええんじゃないかの」
なるほど。なにか燃やせるもの、燃やせるものは……。
「ん、無いかの？　こっちにも燃やせそうなもんは無いがの」
私とN氏は、メンコさんの鼻に詰められたティッシュをじっと見ていた。
火をつけて落とすと、光は小さくなっていく。しかし案外深くまではいかなかった。落ちても骨折や、ましてや死ぬことはあるまい。我々は続いてゆっくり降りていく。
横に続いた穴を抜けると、そこは見渡す限り蛍光緑色であった。
テケリ・リ！
キャベツの海に埋もれたてけてけ達が蠢きひしめき合い、呼応して光を放つ。例の木琴めいた音が洞窟内に響き渡り、鼓膜を破らんばかりである。
「沢山いるな……」
左隣のN氏が押し殺した声を出した。頷こうとすると、私の手にねとついた液体が落ちた。肩がビクリと反応し、その元を辿ると右隣のアホが出したよだれであった。
「うまそう……じゅるり」
メンコさんは視線を一ミリも動かさず、瞬きもしない。
「な、何が」

「てけてけ。ぶちうまそうじゃ……ハアハア」
あんなものがおいしいわけ……待てよ。草食動物は旨いというのは常識だジョジョで言っていたから間違いない。更に肉の質は餌の質が高ければ高いほどうまいという。
じゃあどうなのだろう。あのキャベツを食べている生物はうまいのではないか。いやいやそんなはずはあるまい。だがしかし――。
「おい、メンコさん！　危ねえッ！」
N氏は指一本分遅く、彼女の手を掴むことができなかった。メンコさんは駆け出し、笑いながら火のついたライターを振り回した。てけてけは異常に火を怖がり、小さく縮こまってしまった。
それはすべすべした緑色の鏡餅のようだった。手の平に乗るサイズになったてけてけの一つに、メンコさんはいきなり噛み付いた。
「うわ……ッ」
N氏は狼狽していたが特に何も起きなかった。硬すぎたのである。
「あがが」
そこで考えうるあらゆる手を尽くしたが、試してみろと言われ渋々噛んだN氏の歯が一部欠けただけであった。
「仕方ねえ。持って帰るか」
一瞬正気かと疑ったが、彼も私もいつも腹を空かせているのである。今回で食べられるとわかったなら、当分は飢えることはないはず。私がもしもダンジョンの奥で迷っている風来人なら迷わず持っていくところである、が。
「でもそんなのさあ……」
メンコさんが縮んで固まったてけてけを私の前に持ってきた。
「ちいと味見してみんさいや」
舐めてみたところ、渋味のある抹茶と豆腐を混ぜたような味がした。好奇心に負け、私はそこにいたてけてけのほぼ全てをエコバッグに詰めて持ち帰ったのであった。
メンコさんの家に帰る頃には、辺りは真っ暗になっていた。彼女はホクホク顔で収穫したもの――てけてけを何度も見ていた。

家に着くとメンコさんの母親が出迎えてくれた。
「どうも娘をわざわざ送っていただいて」
着物姿のにこやかな化粧美人である。優雅な動作は息を呑むほどだったが、N氏は「なんかおかしくね？」と私に耳打ちした。
言われてみれば笑っているのは口許だけである。目が怖い。
「小学生の女の子を連れてこんな遅くまでどこを冒険してらしたのかしらそれとも」
メンコさんは小学生であった。発育がいいってレベルじゃねえぞ！
「いいからほっといてよ。私の勝手でしょ」
メンコさんは母親に向かって悪態をつきながら我々の背中を押した。すぐに台所へと着いた。
母と娘の喧嘩を聞きつつ、テーブルへてけてけをぶちまける。
「やっぱ今日は帰った方がいいんじゃねえか？　親子喧嘩してるしよ。あれ俺達のせいじゃね？」
私はグラスにビールを注ぎ、泡の具合を確かめる。
「プレミアムモルツか……ブルジョアめっ」
一気にあおった。体内に残る、洞窟の不快な瘴気が洗い流されていく。喉奥から出そうになる高い声を抑える。
「……うむ」
N氏が後頭部を叩いた。
「なんで飲んでんだよ！」
何故飲んだか？
「そこに酒があったから。や、初めはてけてけを調理するために、付け合わせの野菜を探してたんだよ。でも野菜室を見たら何故かビールがあったんだ」
真っ直ぐ相手の目を見て言う。
「ビールが――あったんだよ」
演説は虚しく、N氏は無視してテキパキと料理を始めた。私はそれを見ながらシンクに腰掛けて飲んでいた。気が付けばメンコさんが傍にいた。

「お母さんはどう？」
私は戸棚にあった柿の種をざらざら流し込みボリボリと咀嚼する。
メンコさんは目をこすりこすり言った。
「怒って寝とんよ」
私は笑って二本目のビールを開けた。

まずは一品目。
てけてけのユッケ。さっと塩茹でしたてけてけの肉と甘めのキムチをゴマ油とニンニクで和えてネギを散らしたものである。
「これは……！」
風味が素晴らしく、てけてけのあっさりした味にゴマ油がよく馴染み、舌の上ではらりと溶ける。茹でると柔らかくなるてけてけの肉、食感は実になめらかである。
旨すぎて私の体はゴマ油に和えられてしまい、そのテカりが七色の光となって農村に朝を迎えさせている。畑に立つ農家の方々が、ご来光じゃあと手を擦り合わせている。違う……私はそんなことをするに値する人間ではない、あまつさえあなた方の血肉にも等しき野菜を盗もうとしていたのだ。おお……赦して下さるのか。全ては、全てはこのてけてけのユッケのお陰なのです！
「しかしこれだけではないよなN氏。あんなにてけてけはあったんだしな」
腕を組んでいたN氏がフフン、と鼻で笑ってオーブンを開いた。
二品目。
てけてけのパニーニ。混ぜてペースト状にしたてけてけの肉をライ麦パンに薄く塗って焼く。黒胡椒・チリソースで味付けした新鮮なレタス・トマト・パプリカを挟んで完成。
香り高いてけてけの肉をペーストにして焼きあげるというアイデアが光る。香ばしくサクサクとしたパンにジューシーな肉とトマトが一体となって口を駆け巡る。

悠久の昔、神の起こした洪水の如く口中に溢れかえる肉汁に溺れそうになりながらもたどり着いた地平は、かつて新大陸と呼ばれたアメリカで生まれたハンバーガーよりも更に新しい世界であった。それはどこか懐かしささえ覚える和の香り。

「これは……！」

「気付いたか。下味に生姜と少量の醤油を使ったんだぜ」

新しい地平はなんと故郷であったか。

「ラストはこれだッ」

N氏が繰り出した最後の料理は……やはりか。

てけてけのステーキ。大根おろしとポン酢のソースはいいだろう。しかしこの鰹節と三ツ葉、付け合わせのエノキは一体……？

てけてけの肉にナイフを当てるとまるで自ら裂けていくようである。なんという柔らかさ。切って口に放り込み、噛む度に歯を弾いていく。

「これは……熱奴だ！」

てけてけの肉は抹茶風味の豆腐といっていいが、それでも肉である。弾力がある。それを利用して、冷たくはららと崩れる冷奴の真逆、熱く力強い熱奴を実現したのだ。

「しかし力強いのならばナイフではこんなに切れないはず……あッ」

「気付いたか。てけてけの肉は繊維が奇妙な形で入っているんだ。ナイフで縦に切る分には易々と切れるが、横にスライスしようとするとナイフごときでは一ミリも入らない」

そこまで計算しててけてけ料理を作るとは……N氏、恐るべし。

傍でじっと見ていたメンコさんが不満げに言った。

「で、結局うまいんかの？」

我々は大量のてけてけ料理を作り、一晩かかって残らず食べた。翌朝、少しは残しておいてくれるとでも思っていたのか、メンコさんの母親は別れ際にもキレ気味であった。

「いつもお腹空いてるんですってね。これで何かおいしいものでも食べてください」
そう言って割り箸を渡すほどであった。メンコさんはまた喧嘩をしそうだったが、我々が黙って見つめているとやめた。
「これでキャベツも大丈夫じゃ。てけてけも旨いしほとんど全部駆除できたかな。言うことなしじゃね」
N氏と私は挨拶して帰途についた。久しぶりの満腹感に幸せを感じる。
もう昼に近く、駅前で丸木戸さんと会った。黄色いTシャツを着て箱を持ち、声を張り上げている。
「あっN氏。募金お願い」
N氏は露骨に嫌そうな顔をした。我々は目を見合わせて、彼女は恐らくまた騙されているのだろうと頷きあった。
「何の募金スか」
「ショゴスって絶滅危惧種。世界でもこの辺りにだけまだ生きてるのよ。いろんな姿に変態するらしいからどんなのかはわからないけど」
あっけらかんと言うが、そんな具体性の無いものがいるか。やはり騙されている。
「キャベツが好物でテケリ・リ！　って鳴くのが目印だよ。見たことある？」
私はあの洞窟の奥で聞いた鳴き声を思い出す。そしてキャベツについて思い出す。それから、あの洞窟の生物は美味しかったことを。
「いや、知りませんね」
N氏と私は歩き出した。
それは普段より幾分、速かったように思う。

料理されるもの騒動（後書き）

読んでいただきありがとうございます。よろしければ感想などお願いします。

覚醒蝶騒動

今回は蝶の話である。

蝶が頭にとまるのは怖い。かつて巨大な蝶が頭にとまったことがあり、それからどうしたのか記憶がないことを思うと、おそらく気を失ったに違いない。誰しもそんな経験はある。

さて恥も外聞もなく言うが私は中学生の頃にエルフなんかが出てくる小説を書いていて、それはありきたりな安いファンタジーもの――三人の男女が夢の世界に行く話であった。

夢の世界は「あっち側」と呼ばれ、そこへ行くには個々人の快適な「眠り」が必要となる。

あっち側では、不思議な能力を得る「遺産」を手に入れたり友情を育んだり喧嘩したり不気味な遺跡を探索したりなどと、波瀾万丈の末に一応の完結を見た。

そんな話を書いたくらいだから、夢に嵌まる素養はその頃からあったということになる。一時期は夢日記をつけてデジャヴュ地獄に陥ったこともあるがこれはまた別の話。

さてさて最近ポアなされた友人N氏のことを、ともすると忘れかねないので「忘れたくてもそんなキャラしてねーぜ、てめーはよ」と言ってやるために、怖かった騒動を色々と書き留めているのだが。

怖いとは何ぞや、である。

怖いと思えば何だって怖い。とりわけ「眠る」というのは恐ろしい。寝ている間、自分は何をされているのか全く知ることができないのである。

普段起きない夜明け前、あなたはビュンビュンという音に目を覚ます。あなたの頭上、数センチもない場所でゴルフクラブが幾度も寸止めされている。しかし寝たふりをしてあなたはじっと耐える。三十分ほど経ち、帰っていくその後ろ姿は、あなたのよく行くコンビニの店員であった……などということが起きていない保障はどこ

にもない。私にだってそんな保障は存在しないのである。
しかしダメ人間の読者諸君にならわかってもらえると思うが、それでも「眠り」は甘美である。考えたくないことはひとまず置いておいて、とりあえず寝る。
意識はぱちんとスイッチを切るようにオフになる。
当時、私は眠くて眠くて仕方がなかった。灼熱の日中だろうが工事現場の隣だろうがＴＰＯをわきまえず寝る。根性が足りない若者めと言われればそうかもしれないが、今思うにあれは立派なナルコレプシーであった。

「何だ、それ」
Ｎ氏はトンカツを噛む。小気味よい音がする。続いてカレーを掻き込む。
「寝ても覚めても眠い病のことだよ」
死相の出ているわりに、とてつもない勢いで食べている。うおォン、俺は人間火力発電所だとでも言いたげに。しかし全くこちらを見ない。
「別にいんじゃね、今夏休みだろ」
私は熱々の素うどんを前にして箸をいったん置き、ため息を吐いた。窓の外は強烈な太陽光線が降り注ぎ、遠くアスファルトが歪んで見える。
「夏休みだからって自堕落な生活は駄目ですって、キュアブロッサムが言ってた」
「プリキュアは病気も許してくれねーのか」
どうなのだろうか。宿題を終わらせない子や夜更かしする子を十把ひとからげに糾弾するその姿勢は、あまりにも近代アメリカ的正義の側に立ち過ぎているのではないだろうか。
「ま、どーでもいーけどよ」
心底その通りだと思う。
「問題はね、眠くてウトウトするときからもう夢が始まってて、起

きると頭が働かないってことなんだ。つまり境目がよくわからない」
N氏はコップを一気にあおった。横を向いて小さくゲップする。
「別に普通じゃね？」
「程度の問題だって、だからさ――」
私は名前を呼ばれて目を覚ました。
「おい」
薄らぼんやりとした視界には、先程と同じく大学食堂が広がる。違うのはN氏が困った様子で見ていること、それにぬるくなったうどん。
「あれ、私、寝てた？」
N氏が携帯を見ながら黙って頷く。
「どこから夢？　プリキュアの話は」
鼻で軽く笑われた。
「そんな話してねえよ……もしかしてそれがナルコレプシーって奴なのか」
時計を見ると十分ほど経っていた。ここ最近の私といえば、いつもこの有様なのである。やれやれだぜ、と。

眠り過ぎるとだるくなり覚醒しづらい、というのは読者諸君にも経験があるのではないだろうか。眠りというのは、慣性の法則が適用されうるものなのである。
――あの夢の続きをもう一度。私は二度寝四度寝八度寝と、あげく「八卦百二十八度寝」と必殺技まがいの名をつけるほどになってしまった。
「で、どうして俺まで寝なくちゃならんのだ」
気付けばヨダレが口許から垂れていた。私は眠気をこらえて拭き取る。ええと、ここはナムの水田、私は蛾次郎であなたは蛾次郎……？　頭が混乱している。
ここは学食、私は私、あなたはN氏。
「どうしてか、どうしてN氏まで寝るか？　覚醒蝶は、覚醒蝶？」

そこで再び目が覚める。私はN氏の部屋にて客用の布団を出してもらい、そこに横になっていたのである。
N氏を見ると珍しくすこやかに眠っていたが、揺り起こしてやった。
「ん、何だ。寝てたか」
頷いて時計を見ると数時間飛んでいた。慣れてしまった奇妙な現象。
「で……ええと、覚醒蝶の話だったか」
そう。確かそこまではいけたはずである。
「私が決定的にナルコレプシーになったのは自堕落なせいもあるけど、基本的にはあの夢の国のせいなんだ」
夢の中、私は鬱蒼とした森の中にいた。湿った風が体中あちこち撫で回していく。
テケリ・リ！　どこか遠く奇怪極まりない声が聞こえる。進んでいくと川に辿り着き、そこで顔を洗った。着物姿のエルフが――。
「エルフ！」
N氏は半笑いで聞き返してきた。
「……あの、ゲームとかに出るエルフか」
「ああ、エルフだとも」
何恥じることがあろう。手垢に塗れた存在であろうと――パッと思いつくのがエロゲキャラで絶望するのは勝手だが――エルフはエルフである。彼らは夢の国に未だ生きているのだ。
「今回はファンタジーなのか。ホラーじゃないのか」
「一体全体、何を言っているのかわかりませんな」
そこでエルフが寄ってきて私に言ったのである。夢の国は素晴らしいが、地下にだけは行ってはならない。そこには覚醒蝶がおり、それに出会ってしまうとこの夢の世界から夢の王により追放されてしまうのだと。
「それで、今まで夢の国を楽しんでたが、現実に支障をきたすようになったから覚醒蝶を一緒に探せと」

虫の良い話だなオイ、と死人のように蒼い顔に書かれている。
「頼むよ……最近、頓に眠る頻度が増えてるんだ」
N氏は私を眠らせないという方向で解決しようと思っていたらしい。だからこそ今まである程度協力的だったのである。つられてナルコレプシーになる心配がないから。しかし今一度、私は一緒に寝て夢に出るよう頼み込んだ。
「やなこった」
「元はと言えばさあ」
例によってN氏の帯霊体質のせいである。旅行帰りのN氏から貰った枕――悍ましく冒涜的な紋様が描かれている――が快適すぎるからこんな有様なのである。
「だから……それは飾るための枕で、使うためのものじゃないって言っただろうが」
「とにかく、責任の一端はN氏にあるんだ。一緒に『覚醒蝶』を探してもらおうか」
私は細い竹で編まれた枕を分解して二つに裂いた。片方をN氏に渡し、もう一方を自分の頭の下に置く。飛び出た竹が執拗にうなじを突きまくり非常に居心地が悪いが仕方あるまい。
顔を上げるとN氏はしぶしぶ枕を下にして目を閉じていた。不健康な白い顔が同じく苦痛に歪んでいた。私も続いて眠る。

目が覚めると我々はひんやりとした森の中にいた。時折風が吹き、木漏れ陽が踊る。N氏は戸惑った様子で私を見ている。
「ここが夢の世界なのか。大自然の先輩にエイッ！」
彼はおもむろにねじくれた古木に肘鉄を食らわせ、凹凸から堅さから痛みから感触を確かめた。実感がないらしい。
「……覚醒蝶を見つけられずに、ここで死んだらどうなるんだろうな」
急に恐ろしいことを言い出したので、私は大いに笑ってやった。
「脳内なんだし普通に覚醒するまで『想像通りの死』を味わうだけ

さ。夢の中だから時間は無限かもしれないけど」
N氏の顔が硬直した。振り向くと袖の長い服を着た女がいた。細い目に尖った耳、石膏像のように染み一つない肌。身長ほどの弓を持っている。これぞザ・エルフである。いやジ・エルフかしらん。
挨拶すると、勢いよくお辞儀してきた。長い金髪が巻き上がって我々の鼻先にかかる。
N氏は舌打ちしたが、聞こえているのかいないのかスルーである。不愉快。
「ネ。マツオスズキッテイツモコエデハンベツスルカラ、カモクナヤクノトキハダレカワカラナイヨネー」
にこやかに話しかけてくるが言葉が違うせいでよくわからない。
「はい？　何か？」
途端に残念そうに眉を寄せた。クルクルとよく表情の変わるエルフである。
「ネ。サイキンオスギトピエールタキノチガイガドンドンワカラナクナッテルヨネ」
知らない言語を早口に呟き、また頭を下げる。髪がひらりと舞って我々にかかる。鼻先がムズムズする。不愉快ここに極まれり。しかし私はこんなことで怒り敵を作るような心狭き人間ではない。恐らく前世はガンジーである。ガンジーは言い過ぎ、小日向文世かもしれない。いやその足元にも及ばぬ。というか小日向さんはまだ御存命である。
「わざとやってんだろ。な」
対してやはりN氏は突っ掛かっていくのである。と、彼は石版がグラグラ揺れるように、ゆっくりと頭から倒れてしまった。背中から突き出た無数の矢から血が流れ出ていた。
「ネ」
エルフは矢を弓につがえ、私を見ている。返り血で真っ赤な顔に、三日月のような口が裂けて現れた。
「這い寄る混沌がきて／覚醒蝶が放たれる／安寧秩序の封殺／崩壊

の夢国／終焉の夜明け／王の交代／終わり／終わらない」
エルフは歌いながら私に狙いを定める。ぎりぎりと引き絞る音が異様に耳に痛い。いや、この音は違う。
「この音は、蝉だ！」

白い天井が見えた。濁流のような蝉時雨が窓からなだれ込む。体中が「軽くひと風呂浴びてきましたよ」と言わんばかりに汗まみれである。
部屋には荒い呼吸と鼓動だけが夢の余韻を残していた。N氏は白目を剥いて意味のとれない寝言を呟き続けていた。今、夢の中で死んでいる最中に違いなかった。
普段にも増してあまりの形相なので起こすのが躊躇われた。冷凍庫からソーダ・アイスを取り出す。食べようと思ったが、よくよく考えればここは彼の家、このアイスも彼のものである。ふと彼の口に突っ込んでやった。
……数分後、くだらない悪戯のせいで正座させられ説教されているアホがいた。というか私である。
「まあいい。あのな……まず設定としてエルフは敵なのか？　そこんとこからはっきりさせろ」
パンツ一丁のN氏が腕をこまねいていた。暑苦しいせいで脱いだのである。自分はよかろうがそんなものを見せられる側の暑苦しさを考えたことがあるのか。
「エルフは異界を守る番人なんだ。あのエルフは歌ってた。覚醒蝶が見つかると夢の国が終わるって。他にも何か色々あったけど……とにかく私とN氏は異界を壊す者なわけだ」
枕に描かれた蝶をなぞる。折れた竹が指の腹に軽く刺さる。痛みが少しだけ心地良い。
「じゃあ夢の国に行くたびに俺たちは命を狙われるんじゃないか！」
パンツ一丁の男が咆えた。全く笑える。
「死ぬのって怖いの？」

「試してみるか？」
いや結構です。私はノーといえる日本人。
「そもそも、覚醒蝶のいる場所はわかってんのか」
地下だったと思う。入口には八重に鍵が掛けられて、まるで防空壕跡のような。土の階段はひたすら地下に続いて――。
インターフォンの音がした。N氏はのそのそと立ち上がると玄関に向かう。
「ペー太の新刊、見つからないからわざわざ通販しちまったぜ」
ライフワークであるエロ本収集について得意げに解説しながら、ドアチェーンを外す。
「ちょ、パンツ一丁で出るなよ。表通りが可哀相だ」
ああ、とN氏は自分の姿をかえりみる。迷彩柄ブリーフ。このパンツが役立つような――それ一丁でジャングルに隠れることは、いったい彼の人生に何度あるのだろう。
彼はしまったという表情をしたが、時は遅すぎた。ドアは開かれた。光が射し込み、眩しくて眩しくてもう何も見えない……。
と、彼は石版がグラグラ揺れるように、ゆっくりと頭から倒れてしまった。背中に突き立った無数の矢から血が流れ出ていた。
私の耳を掠めて矢が布団に突き刺さる。震えて見える。それは私の体が震えているせいかもしれなかった。光の中から出てきた者に目を向けた。
「ネ。オトウサンスイッチガアッタラ。ハ。ハタラク。ハ。ハタラク。ハ。ハタラク。ハ。ハタラク……」
意味不明な言語のエルフがいた。同じエルフだ。矢が放たれる。風切音がする。違う、これは口笛だ！
実家の天井が見えた。木目を残した和室で、父親の口笛が聞こえてきた。冷や汗が滲む。ほっと息を吐く。そういえば私は高校生だったのだ。
枕元に置いたノートを開く。転がり落ちたペンを拾い、私はそこ

の最新ページに先程までの夢を書いていった。エルフがいた。N氏がいた。すぐに夢がどんな結末を迎えたのかわからなくなり書くのをやめる。

夢日記。

家も学校もつまらない私は、夢日記をつけている。私はよく足元から崩れ落ちるようなデジャヴュに陥る。全て過ぎ去った後にもう一度経験させられているような。

「あ、これ夢で見た」

つまり予知夢。この日記は予言の書というわけだ。そのうち、このN氏という輩とも出会うに違いない。

過去のページを遡ると、N氏と出会う夢、N氏を騙す夢、N氏が死んだ夢まで書いてあった。パラパラとめくっていくと気になる言葉が目に飛び込んできた。

「覚醒蝶……？」

中学生の頃の日付である。はっきりとした文体で最後まで書かれている。

これは夢じゃない。僕は家の近くの竹藪に行った。そこで噂を思い出す。ボウガンを持った変人が竹や猫や鳥を試し撃ちしてるって。だからそこには矢の刺さった鴨や傷口の膿んだ猫が寄り集まって歌っている。

洞穴に近寄る者は容赦なく撃たれるのだ。僕はそこに行かなきゃならない。次は僕の番だから。

澱んだ空気がスニーカーにひんやりと染み込んでいく。漂う生臭さが――壁の苔が――奥でぬめぬめ光る数個の瞳が――あった。

気づかれた。低い声が響く。

「次は、君の番だ」

朱色の蝶が飛んでくる。クルクル巻いたストローが僕の頭に伸びて……目が覚めた。

ノートに影がさし、顔を上げると窓辺に男が立っていた。死相が出ている……というより死んでいる。胸から尖った矢が飛び出ている。私にはすぐにわかった。N氏は窓を跨いで入ってきた。彼は血の滲んだ手でノートを奪いとり、パラパラと繰ると倒れ込み絶命した。

その後ろにはエルフがいた。弓を引き絞って私を狙っている。風がノートをバサバサとはためかせる。いや、違う。これは鳥だ。水鳥の飛び立つ音だ！

目が覚めた。N氏が神妙な顔で覗き込んでいた。

「ん？　おお気が付いたか」

周囲は虎でも出そうな竹藪である。私は枯葉の重なった場所に寝ていた。傍には池があり、矢の刺さった鴨が泳いでいた。

そうだ私は大学生だった。N氏と覚醒蝶を探していて夢の国から現れたエルフに襲われたのである。

「やっとわかったぜー。夢だけど夢じゃなかった。覚醒蝶はココにいるんだ」

私の額を人差し指で突く。すぐにはたき落とす。

「さすが何度も死んだだけのことはあるね」

彼は苦笑いして何も言わなかった。

「私もわかった。さて、夢の終わりへ行きますか。夢の王を殺さなくちゃ」

我々は湿った洞窟へと降りていった。地下へ向かうにつれ、まるですり潰した生魚を壁面全体にでも塗り付けているかのような臭気に包まれる。靴先も見えない暗闇が我々の輪郭を侵食する。

「ネ。サイキンクチカラトランプダシテタヒトミナイヨネ」

やはりエルフがそこにいた。穏やかな表情で私を見ていた。

「私は中学生の頃、覚醒蝶を見たことがあったんだ。そこで私の頭

に取り付いた」
私の頭の上に巨大な朱い蝶がとまった。そしてデジャヴュ。足音が聞こえてきた。全てわかる。
「次は、君の番だ」
蝶が飛んでいき、少年の頭にストローを挿して吸い出し始めた。
「全ては約束された出来事。大掛かりな王の交代。青い鳥はいつもすぐ傍に。この夢の王は私」
エルフが私を弓でひゃうふっと射った。
「私を抹殺するのが肝要」
風景に亀裂が入り、光が洩れてくる。N氏は戸惑い、中学生は光になり、エルフは目を見て頷いた。これで夢は全部終わり。さあ、次の幕を上げよう。

目が覚めた。夕暮れのがらんとした学食である。N氏は漫画を読んでいる。
「ん？　どうした」
目の前には熱いお茶が一杯。どうやら私はうたた寝してしまったらしい。
「いや……別に。ただ、夢を見た」
長い間眠っていた気がする。窓の外には紅葉がはらはら降っている。少しだけ肌寒い。
私は目を見開いた。
どこから入り込んできたのか、N氏の肩に蝶がとまった。小さな朱い蝶である。追い払おうとして、手がぶつかってお茶が零れた。彼は慌てて漫画をしまう。
「おいおい何してんだって」
動じない私。
「いや……なんかさあ、ホントに怖いのは、眠っちゃうより目が覚めることだよなーって」

いつの間にか、蝶は何処かへ消えていた。

ヒトノエ騒動

驚愕の事実というのはいつだって足元に不発弾のように埋まっているものである。父親と母親が昔緊縛ＳＭのホームビデオを撮っていたことや、住んでいたアパートの小さな中庭から三十匹相当も猫の骨が出てきたことなど。

前者については触れないが（お察しください）、後者は前の住人が好奇心から夜な夜な猫を拾ってきては断末魔を録音していたらしい。好奇心、猫を殺す。違うか。

しかしまァ今更どうということもない。夜になると猫の鳴き声が聞こえる程度でカワユスなあ。

そんなものより心臓につららを打ち込むように――インパクトあふれる怖いものとは何か。

それは更に身近で知りたくなかったモノである。足元どころではない近さ。例えばラジノリンクス、ウマバエである。Ｎ氏は検索したが、賢明なる読者諸君は検索してはならない。絶対に、である。後悔する。

その朝、月曜だというのに私は疲れ果てて泥のように眠っていた。全身が痛い。ちょっとした好奇心で「御百度みくじ」をしてきたせいである。

他の参拝客に迷惑のかからぬよう決行は朝の四時。日も射さぬ暗闇に青息吐息で階段を登り降りする様はさながら蕩けるベトベトンである。

「凶。待ち人来たらず」

ここ名呑町の麻東洲（あざとうす）神社は山の目立たない場所にある。小さな割に、最近は縁結びのパワースポットとして婚活女性に注目を集めている。おかげで参拝客は多い。

「凶。待ち人来たらず」

曰く、そこの縁結びみくじは百回引けば九十九回は凶が出る。しかし百回目には大吉が出現し、必ず「運命の出会い」があるというのである。ただし御百度参りを踏襲し、毎回階段下の鳥居から上がってこなければならない。

「凶。だから運命的にもう来ないんですって。諦めましょうよ」

今は冬。息白く人恋しくなる季節であるが、私は木の股から生まれたような人間であるのでそんな叙情性は皆無。独り大好きっ子である。ただ、得体の知れぬ好奇心だけが私を突き動かしていた。

「狂。もう五十回は引いたか？　クレイジーな奴だぜ」

次第におみくじの文はおかしくなりはじめた。私は息も絶え絶えに、麻東洲神社に湧いているという御神水をゴクゴク飲んでやった。

階段は的確に私の脚にダメージを与えてきた。膝がガクガク震え、まるで生まれたての小鹿である。早くせねば健脚の老人達が私を嘲笑いながら追い抜いていくことだろう。

それから、ただひたすらにおみくじを引くこと数十回。とうとう出た。

「大吉。待ち人、絶対来る。べ、別にあんたが百回も引いたから大吉にしてやったんじゃないんだからねっ！」

……ふうん。

目を覚ますと昼過ぎだった。何を思ったか目覚ましブラックガムを噛みながら寝てしまったらしい。シャワーを浴び、体になかなかついてこない頭を合致させ大学へ行く。

腹の底がぐるぐる鳴った。そういえば何も食べていなかった。学内コンビニに入ると狭い売り場に人がごった返している。

それなりに背の高い人間はこういう場所が苦手である。自分がいるだけで邪魔になるうえ速く動くと恐がられる。あげく少し離れて人が減るのを待つことになる。

隣には私と同じくらいの身長をした女性が棒立ちしていた。

「ううん……」
流れに入ろうと何度も挑戦するが、勢いよく通り過ぎる小さな女子集団を前にうまく踏み出せない。アップにまとめた黒髪が揺れた。
数分後、私は人の空いたところへのっそり歩いていった。ここのおむすびは全般的に海苔が塩辛いので却下。かといってパンはすぐに腹が減る。弁当は高いし、甘い菓子類は食べたくない。
「揚げ肉まん？　そんなのもあるのか……」
肉まんは好きだがジャンク過ぎるかと思いつつ手を伸ばす。と、横から手が出てきてぶつかった。
「あ、すいません」
反射的にお互い謝る。先程の女性である。よく見れば大きなサングラスとマスクがまるで口裂け女のコスプレ。間から覗く皮膚は、肉が沸騰したまま固まったような有様。
ジロジロ見られて不愉快だろうが、私は何故か見とれていた。彼女はふふ、と笑った。
「あの、肉まんどうぞ」
マスクの奥からくぐもった声がする。大きな体に対して必死に搾り出したような細い声。見ると、揚げ肉まんは残り一つしかなかった。
「いやいやいや、貴女がどうぞ。肉まんは嫌いなんで」
彼女は静かに微笑んだ。
「私も興味本位ですから……どんな味かしらって」
好奇心旺盛な人は素晴らしい。というか、何故か私はもう彼女を好きになっている。ラブストーリーは唐突に。顔を見るのも恥ずかしい。もっとも、相手の顔の大部分は隠れているが。
「とにかく、こっちは嫌いなんで」
顔を隠し、私は目を合わせずに逃げ出した。読者諸君よ、さあ殴れ。好きな女性を前にして私はチキンである。ただ言い訳をさせてもらえば、もう一秒あの場にいたなら私はどうかしてるとしか言いようのない台詞を吐いていたはずである。

「あの、どこかでお会いしたことはありませんか」
運命の出会い？　とんだ恋愛中毒だぜ。しかし心当たりはある。
次の授業は生物学入門。急いで講堂に入る。学生たちの中に、澱んだ紫色の空気を醸し出している場所を見つけ、向かった。
やはりN氏である。本日も全身から死の予感を漂わせているダイ・イージー。おー、と彼は面倒そうに低い声で挨拶する。私は席を一つ空けて座り、そこに鞄を置く。授業開始のチャイムが丁度よく鳴った。
「えー、皆さん知りたくなかったことかもしれませんが。天然魚の殆どには何らかの寄生虫がいまーす。えへ」
ざわつく学生を前にして、白衣を着た小柄の教員は朗らかに笑った。線のような目はどこか腹黒そうにも見える。
「今回は昨日に続き、内部寄生虫の話でーす。魚類といえば有名なのはサバにつくアニサキスですねー。コイツは生で食べてしまうと危険でーす。胃液に苦しんで胃袋を食い破ります。えへ」
前回の内容が全く思い出せず、ノートを見るとウマの胃袋で繁殖するウマバエの巣の模写があって吐きそうになる。
「どうしたよ、自ら喜々として描いたくせに」
N氏が小声で言った。
「本当に？　全ッ然思い出せない」
教員はマイク越しに続ける。生き生きとした様子である。
「サンマを食べてる時、オレンジ色の紐が出てきたことはありませんかー。アレは腸ではなくラジノリンクスという寄生虫ですー。食べても無害ですけどね。えへ」
更に自分のノートを遡る。ウマバエが人間の皮膚に卵を産み付け体温で孵化し、毛穴から入り込んで肉を喰い太っていく図が二、三点あった。「返し針があり、抜こうとすれば激痛が伴う」と、とんでもない解説が加えられている。寒気と痒みが一気に肩を駆け抜けた。

そしてやはり描いたことを覚えていない。まるで不発弾の塊のようなノートである。私の正気度が急降下、一時的狂気に陥りそうだったのでそれ以上見るのはやめておいた。

「それから縁起物のあいつですねー。天然モノだけでなく、お店に売ってる鯛なんかの口も覗いて見てくださいねー。もしかしたら彼と目が合うかもしれませんよー。えへ」

真実を知るショッキングな授業が終わり、足のふらつくN氏と外に出る。なんだかんだで慣れた私はまた新しい寄生虫をノートに一体増やしていた。

「おれは次の授業、発表あるから印刷してくる」

N氏はパソコン室へとさっさと歩いていってしまった。

空の胃袋はぐうぐう鳴いて待遇の改善を主張する。そういえば何も口にしていない。まあ落ち着け、とガムを頬張る。鼻からミントの香りが突き抜けていった。

教室で次の授業を待ちながら、ふと彼女の顔が浮かぶ。私はペンを持ち、ノートの空いたところに描いていこうとして――閉じた。

ノートにはサングラスとマスクを着けた女が数ページに渡ってびっしりと描かれていた。手の平に汗が滲んだ。恐る恐るもう一度開く。

「運命の出会いか、それとも」

傍には私の字でそう書かれている。まさに今、私が思っていることが。更に、知らない授業内容が板書されている隙間に彼女がひょこひょこと顔を出していた。この野郎、全く授業に集中してねえ。

「またムシカイ先輩か」

頭上から野太い声が降ってきた。反射的にノートを閉じた。

「お前、最近そればっかりだな」

呆れた顔のN氏がいた。灰色のリュックを置いて椅子に座る。

「ムシカイ」

私はその名を噛み締める。

「蟲を飼う高貴な子と書いて蟲飼貴子。何度目だ、これ」

ムシカイタカコ。
蟲飼貴子！
神秘的な名。素敵。麗しい。奇怪。奇妙。すごい。レベル高い。ぱねえっす。もうあの人なら名前は何だっていいのかもしれない。
蟲飼貴子。
初めて聞いた。しかしN氏は面倒そうな様子で、何度も言っていたようである。私は忘れているらしい。それならやることは一つである。
「ちょっといいかな」
私はN氏に一つ一つ質問し聞き出した。彼は心底うんざりした顔で蟲飼貴子について答えた。
その特異な風貌により有名であること。休学していたこと。二十三歳らしい。友人は多い方ではないこと。ミリオネアでテレフォンの相手として理想的なことから「ミス・テレフォン」と呼ばれるほど知識を持っていること。大学の屋上に出没すること。誰もその素顔を見たことがないこと。見ると死ぬ。声を聞くと死ぬ。名前を言うと死ぬ。とりあえず死ぬ。
「……ヴォルデモート様みたいだな」
そこまでノートにメモして次のページへ行くと、既に上記と全く同じものが書かれていた。私は以前メモしたことさえ忘れていた。その下には自分から自分へのアドバイスがあった。
「N氏に昨日のことを聞け」
昨日は日曜だった。今朝、御百度みくじをして、眠り、今に至る。異議あり。記憶がおかしい。何故昨日の授業をとったノートが目の前にある？
「気付いたか。初めの方は毎朝説明してたんだけどよー。もう面倒だから本人が気付くまで言わねーことにしたんだ」
N氏が私に起こったことの説明をはじめた。その口ぶりは年配バスガイドのように無駄が排され洗練されており、もはや話しつつ漫画を読むという曲芸じみたことさえ平気でやってのけた。

つまるところ。
「今日は木曜日だ。生物学の集中講義は明日で終わり。お前は今、毎日出席して誰よりも熱心に聞いてるが次の日になると全部忘れてやってくるトリ頭野郎だと教員の間で話題になっている」
N氏はこともなげに言う。携帯を見ても木曜日である。楽しみにしていた寄生虫の授業はほとんど聞けていない、と。
「じゃあ私は毎日、同じことを繰り返してるってことかい？　原因は？」
N氏は何度か軽く頷いた。
「ここんとこ毎日お前と話し合ってるが、何回目でもやっぱりその神社のせいってところに落ち着くな」
運命の出会いを呼んだ御百度みくじ。階段を下って上って繰り返す。今は何度目、今は三度目。
蟲飼貴子とどこかで会った気がしたのは運命などではなかった。脳内に薄ら残った記憶が反応しただけだった。
「だが毎回神社に行くけど何も見つかんねー」
「あ、じゃあこれまでやらなかったことを試せば……」
N氏は諦観の笑みを浮かべ、鼻で笑った。
「そう言ってお前さんは昨日、俺の自転車で神社の階段を一気に駆け降りていったんだぜ……」
「ああ道理で体中が痛いと思ったよ」
話の風向きが悪くなってきた。ガムを風船にして膨らませる。視界の下半分に緑色の円ができてくる。
突如、N氏が私の後頭部を叩いた。何度も何度も。
「吐き出せ、早く吐け！」
わけがわからないまま、私はガムを出した。それでもまだ頭を掴んで揺さぶる。N氏、御乱心である。仕方なくボディブローを入れた。
「で、何」
N氏は無言で私に口を開かせ、撮った写メを見せた。私の全身に

鳥肌が立ち、背筋がびくんとのけ反った。
私の口に白っぽい生物が二匹いた。十数対の脚を持つ多足類である。大きな黒光りする瞳と目が合ってしまう。牙と前脚で舌に吸い付いていた。
しばし一人で阿鼻叫喚である。
「ヴェ。吐きそう。エイリアンの口から出てくる奴だろコレ」
「ヒトノエっていう神様みたいなもんらしいぞ」
N氏が携帯で検索をかけてくれた。読み上げながらニヤニヤ笑っている。

ヒトノエ。人の餌と書きます。逆ですけどね。人が餌なんですけどね。現在では滅多に見られなくなりました。
神社などの聖域にある水などから人体に入ります。普段は口におり、憑かれた人が眠ると這い出して約一日分の短期記憶を食べます。それにより起きていた時の記憶を失ってしまいます。
たいていは二匹のつがいでとり憑き、ある程度の記憶を食べると脳内に卵を生み付けます。数日すると孵化して長期記憶の方まで食い荒らします。宿主は廃人同様となり支離滅裂な言動を繰り返して一生戻りませんが、それ以外は一般生活に支障はありません。
昔からその筋では縁起物とされ、寄生された人は神の子として崇められていました。つがいで寄生する点から、運命の相手に出会い、更に子宝にも恵まれると言われています。

「……だと。神様だとさ、良かったな」
「ああ気付いてるかな、途中から完全に寄生虫の説明になってること。追い出す方法は？」
N氏は黙って首を振った。残念だが……と。
「嘘だと言ってよ、N氏！」
私は彼を掴んで揺さぶるが、ふとその肩が震えていることに気づく。

「俺だって、親友が廃人同様の神の子になるなんて、そんな悲しいこと認めたくないんだ……」
「おい口元ニヤけてんぞ」
散々嫌がらせしてきたツケか。駄目だ、早くなんとかしないと。

一ッ風呂浴びて布団に入る。とはいえ勿論眠るつもりはない。目覚ましブラックガムを噛みつつマキシマムザホルモンの曲を流し、読みかけのワンピース三十二巻を開いた。
どうにもできずに夜遅くなってしまった。訪ねたが、麻東洲神社には神主が存在しなかった。管理人がいるだけだったが、全く神社とは無関係な人間で歴史も何の神が奉られているかもわからないようだった。
こうなってくると何故私は御百度みくじなどという馬鹿げたものをやってしまったのか、後悔してもしきれない。好奇心、俺を殺す……。

目が覚めた。
昨日の御百度みくじのせいで全身が痛い。ガムを噛みながら寝てしまったらしい。今日から生物の集中講義である。シャワーを浴びると大学へ行く。
腹の底がぐるぐる鳴った。そういえば何も食べていない。昼時の学内コンビニは人でごった返していた。
人の波にうまく入れずにいると、サングラスにマスク姿の大女が隣にいた。かなりの身長である。
「あ、こんにちは」
小さくかすれた声。しかしゆっくりと、相手を包むような。
「どうも」
どこかで会ったか？
軽く会釈をするが、顔を見ても思い出せない。顔といっても大部分は隠れているが。気になるが恐らく見られたくない事情があるの

だろう。私は目を逸らした。
「あのう、私の素顔を近くで見た人は……倒れてしまうのです。生れつき顔がグチャグチャで」
彼女は寂しげなトーンで話し、こちらを見て微笑んだ。
「どうしてマスクとサングラスで顔を隠してるのかなって思ったでしょう。そういえば言ってないですもんね」
自意識過剰な奴。それに馴れ馴れしい。会ったことはない。記憶力には自信があるのだ。これはただの面倒な人である。
「あ、面倒だと思ってるでしょう」
何故考えていることがわかる。
私は気味が悪くなり、肉まん売り場の前に立った。彼女はついてくる。
「揚げ肉まん、食べないんですか」
「いいえ、嫌いですね」
私は顔を上げることができない。体が熱くなって震えてきていた。
「嫌いって、嘘でしょう。いつも揚げ肉まんが気になってるんですよね？　遠慮せずに食べて下さいよ」
心を全て読まれているのに、何故こうも私は危機を感じないのだろう。そして彼女が好きになってきているのである。
「じゃあ、お言葉に甘えて」
揚げ肉まんと茶を買う。私は傍にあった卓に置き、椅子に座った。彼女は当然のように向かいに座った。
「それから、どうしていつもそんなに他人行儀なんですか。まるで初めて会ったみたいに」
困った声。不可解である。
「あの、スミマセン。こんなことを言うのは非常に失礼だと思いますが、誰かと勘違いしてませんかね」
あ。
泣き出した。
こんな人通りの多い場所で。私が泣かせたのである。こんなにか

わいい人を。不意に抱きしめたくなったが犯罪だからやめておこう。
彼女はしゃくり上げるように話した。
「私をからかってるんですか？　一昨日、私に告白してくれたじゃないですか。一目惚れだって。話が面白いって」
ええと。ドッペルゲンガーか。誰かが成り済ましていたか。罠か。ハニートラップか。何が目的だ。
「それで、貴女の返事は……」
彼女は首を振った。それは当然の結論である。こんなオカルト狂いを好きになれる方がどうかしている。聡明な女性だ。そして私はこのわけのわからぬ状況でも、やはり落ち込んでいる自分を発見する。
「まだ返事はしていません」
いっそ今すぐ振ってくれないものか。
「素顔を見てくれないと」
私は先程からずっと目を逸らしている。手に汗が滲んで鼓動が大きくなってくる。
彼女がサングラスとマスクを外して卓上に置くのがわかった。人々が速足で離れていく。私は俯く。
「……どうして見てくれないんですか」
説明しろというのか。
「貴女は私の心が読めるわけではないんですね」
彼女も俯く。周囲には誰もいなくなっていた。静かな空間に揚げ肉まんの油っぽい匂いが流れていた。
「いいですか、私は……」
ハニートラップ？　ドッペルゲンガー？　そんなもの、どうだっていい！　顔が熱い。汗が噴き出す。鼓動が速いのである。何故ならば私は。
「貴女が好きなんです。顔を見るのが恥ずかしいくらいに大好きなんです。正直、貴女のことは思い出せませんけど大好きだって頭の中の片隅にいる誰かが叫んでるんです。はい、照れてます。恥ずか

しいですね。でもそれだけです、それだけだから――」
顔を上げた。
「私は真っ直ぐ貴女を見なきゃなりませんね」
悍ましい風貌。痛ましい傷跡。腐ったような色の皮膚。目は弛んだ肉で半分隠れている。歯はまばら。まるでB級映画のモンスター。それでもお化粧をしていた。
「なんだ、味のある顔って程度じゃないですか。こんなことで気を失うわけがない」
私は笑いながら茶を飲む。
「あなたは嘘つきですね、ふふ。手が震えてますよ」
「これは寒いからです」
彼女が笑顔になった。私も嬉しい。続けて揚げ肉まんを頬張る。衣がサクサクして、中身がジューシー。油まみれのザ・ジャンクフード。
突然彼女の目が大きくなり、何か叫んだ。
「どうかしました？」
「ちょっと、口を開けて下さい」
咀嚼し終えてから言われた通りにする。急に頭の中がスッキリしてきた。
「いや、気のせいです。私の顔を見て、どこかに行ったみたいです」
何が、とは聞かなかった。どうだって良いのである。彼女と目を合わせて生きていられるのは私だけで良いのである。
彼女ができたことをN氏に言えば毒液のように呪詛を吐きかけてくるに違いないが、その顔はわりと楽しみ。
さあ誰だってかかってこい。そして殴れ。夢じゃないと証明しろ。私に、とんでもなく素晴らしい彼女ができたぞ！
ちくしょう死ねばいい！

幼女幻症騒動

「食材を多く買い過ぎた。腐らせるのもなんだから食べに来ないか？」

メールの文面を眺めると、微かにくすんだ靄のような感情が漂っているのがわかった。

タダ飯が食えるなら行くよ、と返信してすぐさま向かった。薄暗いアパートは白い肌に苔を生やしていた。鍵の掛かっていないドアを開くと、N氏は奥の部屋で窓辺に立っていた。

その事件の後、N氏はじっと窓から外を見ていることが多くなった。

私も横に立ってみる。

町のそこかしこに潜んでいた影がゆっくりと膨らみ、世間を覆っていく。現実が異界と混じり合い、撹拌されていく黄昏の時間。

隣を見ると、黒目がちな瞳は無表情に夕陽を映している。

無口なN氏は自身について多くは語らなかった。どこから来たのか。どうしたいのか。どう死ぬのか。何が見えているのか。

恐らく世間には彼にしか見えないことが数多くあったはずである。私にしてみればそれは非常に「怖い」ことであるけれど――しかし彼は夕陽から目を逸らさずに言うのだ。

「怖いと思うから、何だって怖くなるんだよな」

どうやら全てはそういうことらしい。

脳みそに電子音が突き刺さる。暗闇に光る携帯を見ると、N氏から着信である。手にとってしばし逡巡したのち、出た。

「おー、やっぱり起きてたか。聞きたいんだが」

起きていたのではない起こされたのだ。私は激怒した。必ず、かの邪智暴虐のN氏を除かなければならぬと決意した。しかし奴は私

を待たずに続けた。
「小学生のパンツって、どうやったら手に入るんだ？」
携帯を持つ手からへなへなと力が抜けた。
「こっちゃ眠いんだよ、冗談はよしこさんですよ。時計見た？　見てないよねえ。だって見てたら普通の人はなかなかこんな時間に電話できないもの。遠慮しちゃうもの。後日改めようとするもの。さすがN氏さんだあ、私にできないことを平然とやってのけるなあ。そこに痺れる憧れるなあ」
一気にまくし立ててやった。電話の向こうが静かになる。やがて水が一滴落ちるように、ポツリと声が聞こえた。
「……めんどくせ」
「ああ！？」
それから数分後、私は怒りよりもN氏が心配になってきていた。
「パンツって……ジーンズとかじゃなくて」
「ああ。年齢としちゃ、小学校二年くらいかな。パンツが欲しいんだが」
なんのこっちゃ。N氏はとうとう人ならぬ修羅の道へと踏み出しているのか。
「男の子のパンツ？」
「おいおい、女に決まってるだろうよ」
決まっていたのか。いやどちらにせよ問題なのは確かであるが。
「それはもちろん履いたあとのヤツだよね」
「なーん、履いてないやつだって！　いったい俺を何だと思ってんだ」
どうやらN氏は想定外の事態に直面しているらしく、要領を得ない。仕方なく私は午前三時に原付を走らせ、途中のコンビニで小さい子用パンツ（ハートキャッチプリキュアがプリントされている）を買った。
それだけだと不審に思われる気がしたので、熟女系エロ本も買う。これでバランスがとれ、立派な成人女性に興味がある人間である。

……逃げるようにN氏のアパートに向かった。
ドアの前でインターフォンを押す。押す。押す。手応えがないのでドアを叩くとすぐに開いた。
「はい、コレ幼女のパンツな」
手渡そうとすると、N氏は手招きした。
「静かに。とりあえず中に入ってくれ」
普段と変わらぬペットボトルや段ボール箱だらけの散らかった部屋だったが、私はどこか違和感を覚えていた。
窓にはN氏の知らないうちに付いていたという手形がある。内側だが何故か彼のものとは明らかに大きさが違う。
押し入れの戸には炭のようになったお札。何故か張替えてもすぐに黒くなるので放置しているらしい。
壁からはギシギシアンアンと喘ぎ声が響く。何故か野太い男の声しか聞こえないが、これはおそらく――。
「消え去れ」
N氏は舌打ちして壁を殴った。静かになる。
全ていつも通りの部屋の様子である。しかし私は気づいた。違和感の正体は、部屋中に散らばっていたエロ漫画の類が姿を消していることであった。これはどうしたことか。ライフワークたるエロ収集を辞めるとは、いよいよN氏は煩悩を捨て悟りの境地に達したか。
「プリキュアか……まあいい。ホラ履けよ」
彼はわざわざ封を破ってパンツを差し出した。
真顔。いつも通りの死相の出た白い顔。暗がりで見れば圧倒されて声も出ないであろう。
少しだけ迷う。これは新手のギャグか何かなのか。素直にノって無理矢理履いてみるか。やれやれ。沈思黙考の果て、然るのちに手を伸ばすと叩き落とされた。
「何考えてんだ。お前じゃない、アヤノのだ」
私は周囲を見回すがよくわからない。はてアヤノとは誰なのか。ここにはN氏と私しかいないのである。

彼は台所から箸を持ってきてパンツに突き刺す。キュアブロッサムの顔にめり込んだ。
「……これで大丈夫か？」
お前の頭が大丈夫なのかと口から出かけたが、怖かったのでやめておいた。N氏は満足げに数回頷くと、穴の空いたパンツをすぐに捨ててしまった。
「さて」
N氏は私に蜜柑を放ってよこした。受け取り、座る。
「やっぱりお前にも見えてないんだな。アヤノは」
ふむ。この蜜柑は頭がおかしくなりそうなほど甘いな。

事の始まりはこうである。昨晩、N氏は近所の墓地と事故の多発している踏切と無数の鳥居が落書きされたトンネルを抜けて帰ってきた。
「どれが原因かはよくわからないんだ。普段からよく通るし」
とにかく帰ってきたらついて来てしまっていたらしい。何が。
「アヤノが、だ」
「その子、今ここにいるの」
静かに頷く。物音一つ聞こえないが。N氏の部屋に居座って追い出せないらしい。
「ことあるごとに邪魔してきて面倒なんだよ。このままでは俺の寿命がストレスでマッハだ」
N氏はどうやら子供が苦手らしい。まァ素でアダムスファミリー入りを果たしそうな彼が子供達と楽しげに遊んでも、保護者の方に通報されかねないが。
「で、パンツは」
「小便漏らしやがったからよ……さすがに局部を野ざらしにさせたままなのはよくなかろうと思ったんだが」
なんとまあこれはこれは。彼が可哀相かどうかは性癖によるので

まずはノーコメントである。
「まあ、良いんじゃないかな。N氏はロリもいけるんだよね？」
「小便臭いし犯罪だから三次元のロリは駄目だ」
意外とマトモな返答。
「倫理感が強いね」
「建前はな」
表情に陰を残してぼそりと呟いた。その含みのある言い方はなんなのか。
「小さい子の前で――しかもお前、自分を父親と間違えてるような子だぞ――そんな子が俺の膝の上で寝てるような状況で、ロリはいいね……人類の文化の極みだよ、なんて言えるか？」
別にそこまで言えとは思っていないが。
「N氏を父親と思ってるのかい、その子」
見えないが、眠っていると聞き少し緊張が和らいだ。ごろりと横になると足に何かが当たる。構わず伸ばすとペットボトルの砦が崩れた。
「ああ。そうなんだよ……っておい、なんてもの広げてんだ」
おもむろに開げた熟女エロ本を、取り上げられる。
「子供の前だぞ！」
合点がいった。だからエロ本の類が全て片付けられ、アグネスを呼んでも問題ない部屋になっているのである。N氏は膝の上にいる見えない何かをそっと布団の上に運び、毛布をかけてやった。その顔はいつもの無表情である。
「それで……あー、相談なんだが。どうしたらいいと思う」
彼は目を泳がせて言った。
「さあね。よくわからない。案外座敷わらしかもよ」
N氏はいつも体質的によくわからないものを連れてきやすく、その周囲にいる者も巻き込まれるのである。
「あいつ飯まで食うんだぞ。真面目に考えてくれよ」
「マジに言えば、病院に行――」

N氏の顔が強張ったのでやめた。
「じゃあお祓い。成仏」
彼もその辺りで話をつけようと思っていたらしいが、その引き攣った笑顔は気が進まないことを物語っていた。
私は気付かなかったフリをして無視した。

というわけで翌朝。ぴりりと冷えた空気にスズメの声がまじる。
「だから父親じゃねーって！」
怒声とともに目が覚めた。N氏がこんなに声を張ることは滅多にない。
「百歩譲って俺が父親だとしても、何故トイレを覗かれなきゃならんのだ」
事態は逼迫しているようだ。私は起き上がる。
「お前も見に来てんじゃねー」
五分後、私は正座して説教を受けていた。隣にはおそらくアヤノちゃんも同じ姿勢でいるはずである。
「お前、アヤノに笑われてるぞ」
そんなのN氏の匙加減一つだろうが、とは言えなかった。彼女はそこに存在しているらしいのだから。
「あ、どうして？」
N氏が急に尋ねてきたが、私から視線がズレているので答えない。
「そんな、ブリブリ博士じゃあるまいし」
一人で笑っている。なんだこれ。
「じゃあ飯にするぞ」
昨晩の鍋の残りがテーブル中央に出てきた。大根の千切りとおろしでみぞれ状態にされ、そこに柚子胡椒・胡麻を効かせた鶏団子と白菜、エノキ、豆腐。よくダシの染みたそれらをポン酢で食べると、うまみにあっさりとした酸味が加わり、飯が進む進む。
「おかわり」
「もう飯がねー」

よく見ればもう一人分、飯と小皿が取り分けられている。飯には縦に箸が突き刺してある。
「あそこのは食べていい？」
あ。
まずい。
N氏の眉間に皺が寄った。
「子供がまだ食べてるでしょうが！」
そうなのか。見えないからわからないのである。配慮が足りなかったか。アヤノが霊的な飯を吸収したらしき後、私は物質的な飯を食わせてもらう。
「それはそうと例の件だけど、とりあえず公園に蟲っちょを呼んでおいたから」
「ムシッチョて誰だよ」
それを聞かれると頬が緩んで口許がだらしなくなるのを止められないが。
「私の彼女」
「死ね」
茶しぶの取れていないコップに茶を注ぎ、一気に飲む。冷たい麦茶が口内をさっぱりさせていった。
「凄い反応の速さだね」
「あーあ、前回が終わってから何だ死ね。先輩か死ね。腹立たしいな死ね。お前が幸せだと俺が可哀相だ死ね。皆死ねばいい死ね。世界なんて終われればいい死ね。一周して大陸横断レースでも始まればいい死ね」
急に死ね死ね連呼してやさぐれ始めたN氏を見ていると、アヤノちゃんは何をもって彼を父親と間違えたのかふつふつと疑問が沸いてくる。
「でも確かに蟲飼先輩の顔ならなんとかできるかもしれないな」
N氏はにやりと笑ってアヤノちゃんのいるであろう空間を見た。

……というN氏の期待は見事に外れた。蟲っちょは不安げにマスクとサングラスを着けなおし、見る者を昏倒させかねない顔を隠した。
「どうなったの。ダメなのかしら」
N氏は苛々しつつ腕を振り払い続けたが、しばらくして諦めたように言った。
「あー、先輩の顔は怖がってるんですけど、余計俺に纏わり付いてきました」
泣きそうな顔でN氏の裾を掴んでいる女の子が脳裏に浮かんだ。
「かわゆすかわゆす。ハアハア私こういうのダメだ、鼻血が出そう」
蟲っちょも同様の想像をしたらしく、額に手を当ててベンチにへたりこむ。そんな貴女が大好きです。
N氏の視線が公園を走り、砂場へ向かった。それからため息を一つ吐いた。
「足が速いから、すぐどっか行ってヒヤヒヤすんだよな」
私は懐かしさに滑り台を逆から登ってみる。頂上に着くと視線が高くなって、まるで別の風景が広がる。小さな頃は怖くて目を開けられなかった。特に夕暮れ時は。
世界中が知らないものだらけだというのに、更に知らない異界へと変貌する恐怖に耐えられなかったのだ。今では自ら覗き込むようになってしまったけれど。
「正直、俺は寺も神社も近づきたくないんだよな」
低い声が現在へ呼び戻した。
「どうしてさ」
N氏は眉をひそめて顔を上げた。
「寺や神社は、なんか嫌な予感がするんだ」
彼にしては曖昧な理由だ、と思いつつ滑り落ちる。しかし大事なことはいつも曖昧模糊とした感情の底に沈んでいる。あるのかないのかわからないそれに名前をつけたところで、掬い上げることは難しい。

当人にしかわからないことは、当然他人にはわからない。
「……アヤノちゃんはさ」
私達は弱々しい太陽に当たり、じっと体温が上がっていくのを待っている。
「N氏のことを何て呼んでるんだい」
彼は口を開いてぱくぱくさせた後、背中を向けながらぼそりと呟いた。
「とっつぁん」
蟲っちょが口許を押さえて笑った。
「ぜぇ～にがたのとっつぁ～ん！」
彼女の物真似はミドル級で、そのあまりの半端さに私は思わず噴き出した。公園には金木犀の香りが息苦しいほどに充満して、秋の終わりを告げていた。

それから二週間近く。
忙しさとイチャイチャにかまけてN氏に会わないでいた。近所のスーパーで酒を選んでいると偶然N氏に出くわした。
「よっす」
と声をかけたが考え事をしているようである。こんなに難しい顔をして食品売り場にいる男を私は知らない。
「ん、おー」
カゴには玉子が入っており、ネギやニラがとび出していた。手に持っているのはピーマンの袋である。
「珍しいね、ピーマン嫌いじゃなかったっけ」
「嫌いなんだが、今のうちこいつにピーマンに慣れさせておけば、俺みたいにピーマンでいちいち困ることもないだろうと思ったんだ。ピーマンは人生において出てくる頻度が高いからな」
などと熱く語る彼は立派な父親然としており、私は飛び級で海外へ進学していくクラスメイトを見ているような――残された人間の気持ちになった。

彼は足元を見て頷きながら笑う。ああ、どんどんN氏が向こう側の人間になってしまう。
「私の分も作ってよ、とっつぁん」
「だからよー……」
と言いつつも何だかんだで家にあがるのを許すN氏は甘い人間である。私はピーマンの肉詰めを作った。アヤノちゃんはおいしそうに食べたらしく、彼はそこはかとなく嬉しそうだった。勿論彼自身は箸をつけなかったので無理矢理一つ食わせてやったが。
「もう寝たの？」
私は缶ビールを片手に、ピーマンと塩こんぶをゴマ油で和えたものをつまむ。テーブル上の小さな積木箱から木製の球を選び、つつつと指先で転がしてみる。
「ああ。放っといてもアヤノって九時には寝ちまうんだ。生きてた頃の習慣かな」
N氏はソーダアイスを頬張った。宙に視線をさ迷わせた。
「生きてた頃の記憶？　ああそういう設定ね」
彼は眉間に皺を寄せ、私を睨んだ。しかし何を言ってくるわけでもなかった。クルクル回る球はテーブルの端でどうすべきか迷ったように行き来し、やがて落っこちていった。
「あのさ」
私の本心を言えば。
「もう良くない？　十分楽しんだよ。小さい子ってのはドウブツと同じでカオスさ、なのにN氏は予想外の事態には陥ってないし。ドッキリにしてはスパンが長すぎるって。前に私がN氏を騙した仕返しかな？」
彼は身を乗り出して聞いていた。私は何故か瞳をまっすぐ見ることはできなかった。
「ずっとそんな風に思ってたのか」
N氏は意外そうに呟いた。無表情で本心が見えない。ただひたすらに彼は頭の中で思考を巡らせ、その漏れ出た雑音が唸り声となっ

て部屋に響いた。数分後、彼は力の抜けた様子でため息を吐いた。後頭部をがさがさと掻いて。
「まあ、仕方ないか。お前には見えないんだから。見える必要なんてないしな」
その諦観の篭った言い草が私のカンに触った。心の美しい者にだけ見える衣を目の前でジャパネット高田ばりに宣伝しておいて、お前は見えないだろうと決めつけられている。しかもやはり私には見えないのである。どんなに目を凝らそうと見えないのだ。
「あのさ、世界中でたった一人にしか見えない触れない聞こえないようなものがあるとしたらさ――それはやっぱりその人の幻覚だと思うよ」
私の言葉は静かな夜の部屋に霧散していった。N氏は執拗に何度も頷いた。そんなことは百年前から承知しているとばかりに。
「……でも俺がその幻覚なら、世界中でたった一人だけ自分を見れる奴に、否定されたくはねーんだ」
お互いに目を合わせず、私は酒を飲み、彼は傍のペットボトルをあおった。時間が経って気の抜けたビールは苦く、まるで飲めたものじゃない。
「なんか……ごめん」
「いや、いいよ。俺もしっかり言わなかったし」
私は缶底に残ったビールを飲み干し、落ちた球を拾いあげた。N氏はベッドの端に腰掛けて話し始めた。
「とっつぁんなんて呼ばれて、俺はいい気になってたのかもな。本当は全然父親なんかじゃない。アヤノはよく寝言でうなされて父親と母親を呼ぶんだよ、だから俺は全然――もう全然こいつを安心させてやれてないのが嫌でもわかる」
枕のあたりの空間を撫でた。傍らの絵本をしばし眺めて閉じると、私を見た。
「次の日曜、ちょっと付き合ってくれ。こいつがやりたいって言ってたことがあるんだ」

その日の名呑町は人の流れが明らかに違っていた。呼び出された場所に近づくにつれ、化粧が濃く紫色の髪をしたおばさんだらけになっていく。時折中年のおっさんがいるが、肩身が狭そうにそこかしこでお互いに挨拶しあっている。

その流れから外れた、川沿いのブロックに腰掛けたN氏が見てとれた。

「やりたいことってこれかい」

我々は高いフェンスを見上げた。その向こうの校庭にはテントが設営され、人々はそこへ流れこんでいく。校門には「名呑小学校運動会」と書かれたゲートが作られていた。

「ああ、アヤノが走りたいんだとよ」

確かに二十歳を過ぎた男がフェンス越しに子供達が走り回っているのを眺めるのは問題だが、だからといって二人なら良いというわけでもなかろう。

「中には入れないのかい」

N氏に顎で促され入口を見ると、保護者とその関係者しか入場できなくなっていた。

「へえ、最近は厳しいんだね」

正直、小学校なんてものにはろくな思い出がないので胸を撫で下ろしている自分を見つける。

「おお、頑張れよ」

フェンス越しにアヤノちゃんが来ているらしく、彼は気合いを入れるように言った。

「何の種目に出るのかな」

「出たい種目に勝手に参加するだけだ。見えないから誰も気にしない。走るのが好きだから、徒競走がメインだとは思うが」

リレーには参加できないが、全員参加の競走ではかなり速いらしく、N氏は大興奮だった。棒倒し、綱引きと眺めていると昼過ぎになり、ジャージを着た教師が我々を汚いものでも見るような目で通

り過ぎていった。
N氏は時折フェンス越しに話しかけ誉めたり励ましたりしていた。
「え……」
急に顔が曇った。
「駄目だ、俺は行けないんだ。ごめんな」
N氏はフェンスに手をかけたまま黙って俯いた。私は背中からフェンスに寄り掛かる。たわんだ編み目に肉が押し付けられる。数秒待って、N氏の周囲に漂う空気が少しだけ変わるのを感じる。
「何があったのさ」
「当たり前だよな。一人が寂しいんだ。アヤノは」
体操服を着た子供達が帽子を投げ合いながら走っていった。険しい顔をした母親が、娘を叱りつけていた。私は冷めた目でそれを見つめる。
「あたしのだいすきな人がそばで見ててくれないかなあ……って、そう言ったんだ」
彼女はN氏のことをとっつぁんとは呼ばなかった。実の父親とは違うということを知っていた。それでも見て欲しいと言ったのだ。
「行こうよ、N氏。ここで行かなきゃ、駄目だ。馬鹿だ。嘘だ。虚空だ。無念だ。後悔だ。絶望だ。クソだ」
沈みこんでいる彼を引きずって入口へと連れていく。まだ悩んでいるらしく、足どりはまるで足枷をつけた罪人のようである。
「いいって、お前だけで行ってこいって」
私は胸倉を掴んで起き上がらせる。彼の顔に夕陽が影をさした。
「あのさ、N氏。わかってるよね。私じゃ駄目なんだ。保護者しか入れない？　N氏はあの子の保護者じゃなかったのか。少なくともここ一ヶ月くらいの間は、君は立派な……」
校庭をぼんやりと見ていたN氏の目が突如大きく開いた。かと思うと、私の腕を振り切って走り出していた。何かあったのだろう、私は追っていく。
人混みを掻き分け、入口のゲートを抜ける。そこで受付の教師に

止められた。
「父兄の方ですか？　事前に配っていた証明書を出してください」
N氏は校庭の方しか見ていない。
「あいつが転んで泣いてるんだ。俺を呼んでる。俺が父親だと言ってる。それ以外になんか証明がいるか！」
私はN氏を突き飛ばす。彼は走っていき、私は教師と話を始める。騒ぎは大きくなり、彼はその渦中にいた。
これでいい。胸がすく思いだ！
目前の教師に謝りながら、口から笑いがこぼれた。体中が熱くなり、血液が巡っていくのがわかる。
私は遠くN氏の様子を窺った。モーセのように人の海が割れている。全員が彼を注視して、まるで時間が止まったようだった。
その中で彼は膝をついて、寂しそうな顔で笑っていた。手を振り、鮮やかな蜜柑色の空の端から群青色が迫っていくのを見上げる。それから下唇を噛んだままゆっくり帰ってきた。
N氏は私の肩を叩いた。
「なんか……ま、色々あったんだが親が迎えに来たんだとよ。笑いながら夕陽に消えてった」
その相変わらずの無表情な白い顔に、ごく僅かなノイズじみたものが見えた。

その後ロリコン男二人が小学校に乱入したということで軽く地元のニュースになった。最近の若者は何を考えているのかわからない、という論調だった。
我々は様々な人から酷く怒られた。彼らが最も気になったのは動機だったが、正直に言ったところでわかってもらえるわけがなかった。謝って許してもらえただけマシである。
あれから彼は夕暮れになると、時々ベランダに出ている。何をするでもなくそこに立っている。あの子のことを考えているのか、そ

れとも他に何か考えているのか、私にはわからない。
彼は余った食材で作った大量の食事をたいらげつつ話し出す。
「……『などとわけのわからないことを供述しており』か。そんなもんだよな」
私は同意する。
当事者でもない人間が理解できないのは仕方ない。私とて詳しいことはわからない。本当は全て彼の狂言だったのかもしれない。
彼が青椒肉絲のピーマンを口に運んだ。すぐに眉間に皺を寄せた。
「やっぱ苦いな……」
それでも彼が少しだけピーマンを食べるようになったのは、唯一確かなことだった。

孤独の宇宙

お前それはもう腐っててゾンビだし、でなければ嘘だろうよという顔色をしたN氏がチラシを見ながらこぼす。

「バトルロワイアル３Ｄか。猫も杓子も３Ｄだな」

「その次見てみ。『北の国から３Ｄ』だよ。元々飛び出てるあの唇が更に飛び出るわけですよホタルゥ～っ」

我々は最近復活した名呑映画館のシートに着席し、上映開始を待っていた。

未だ観客の一部はポップコーンを持ってウロウロと行き場を無くしたティーンエイジャーの如く、さ迷っている。

というかよく見ればリアルハイティーンばかりである。

というかリア充である。どうせスポーツサークルなどという曖昧模糊とした名称の集団で実情は「渋谷で海を見ちゃったの」系のよからぬ薬物をキメキメ乱交会合をメインとした活動に違いない。人類皆穴兄弟もしくは竿姉妹を信条としたラヴアンドピース的なヒッピー運動ってそっちの運動でしたか先生知らなかったです。

さて奴らは欲望に負ける豚である。「遊ぶ」と決める際も既存のリア充的「遊び」の中にしか選択肢が存在せず、自らの意志はどこにもない。従って、決めた「遊び」の最中にもその「遊び」自体に対してしばしば不謹慎な行動をとる意味不明な異星豚である。

映画館とは映画を見るための場所だというのに、性欲の抑えきれぬ豚どもは「誰が誰の隣に座るか」などという瑣事にキャッキャウフフ、否、ブッヒブヒヒと心の中でヨダレを垂れ流しながら前戯まがいの行為を始めている。

そこへ考えるに私とN氏はどうか。お互いに馴れ合いなどは皆無。私は淡々と足早に最もスクリーンに近い席を目指すのみ。N氏は腹に括った一本槍としてエロメディア収集がライフワークであり、それを突き詰めた結果、もはや欲望に対してストイックでさえある。

エロメディアに関係しない場合はそこらのパンチラ程度にも動じない。もはやマスター・ヨーダの如く悟りは目前といった状況である故、彼らのようにしたいなどとは微塵も考えていない。と思い隣を見れば紫色の顔でブツブツと呪詛の言葉を吐きながらリア充どもに舌打ちをしていた。

「爆発しろっ……！　細胞全て消え去れっ……！　彼女がいる奴らは全員市中引き回しの上に打ち首獄門だっ……！」

失礼、私の見込み違いだった。N氏は高すぎる独身力故に既にフォースの暗黒面に堕していた。

「よ〜しよしよしよし」

私の畑正憲クラスの撫で方にN氏は大人しくなる。

「……先生、彼女が欲しいです……」

それは切実な願いだった。

と、我々が血の涙を流しながら偏見と妄想で怒り狂ってリア充を眺めているとブザーが鳴った。

場内が暗転して観客は静かにスクリーンを見つめた。我々は眼鏡をかけ直す。各々の輪郭が暗闇に溶け埋没していく様はいつも心地良い。私は映画館を愛している。故に上映中の携帯電話の光は許せぬ。普段映画など大して見に来ないリア充が携帯を開くカチッという音が聞こえると「小足払い見てから昇竜余裕でした」レベルの超反応で舌打ちをして注意を促す。

カチッ。

チッ。

カチッ。

チッ。

非常にリズミカルであるがよくよく考えれば舌打ちも迷惑行為なので本末転倒であることは読者諸君と私の秘密だ。

「あの『プリリット・ショーツ』のスタッフが集結！　彼女はやり手の警察官。恋愛にはちょっぴり疎い。彼は冗談好きなデイトレーダー。お互いの一目惚れから幸せな二人は電撃婚約！　ところが彼

の正体は……『結婚詐欺師だったの！？』　結婚？　恋愛？　オンナの本音が詰まったラブコメディ。『百万の嘘に、真実の愛があった――』」

新作映画の宣伝が始まった。こういうスイーツ（笑）向け恋愛映画は常に同じようなCMをしていて、同じナレーターに同じ編集である。それでも飽きもせず観られているのだからある種のお約束か。まあレネー・ゼルウィガーのふとましい体を見たいがために借りた『プリリット』は意外と面白かったがな。脳味噌カラッポだからドクター・レクター的には物足りないかもしれないが。

N氏は次々に流れていく宣伝を見ては、興味なさげに烏龍茶をストローで飲む。氷の音が微かに聞こえた。そんなハイペースでは上映前に無くなってしまうだろうに。

しかしこの「上映時の飲物をいかに消費するか」という問題は難しいので考えてみたい。待て、そこ！　話がクドいからといって「考えてみたい？　そうですか」と読むのをやめるんじゃない。

まず飲物をセレクトする際だが、ここで馬鹿正直に好きなものを求めるのは映画館素人である。ジンジャーエールを頼みたくなるのはわかる。私も人の子だ。わかるが、ここは烏龍茶など「氷が溶けても比較的被害が少ない飲物」が得策である。多くの者は映画に夢中になっていると飲み頃を見失って最終的には氷が溶けたものを飲む羽目になるのである。オレンジジュースなど愚の骨頂である。

勿論、全て承知で開始三十分程度で飲みきることを己に課すのなら話は別であるが、そうなると今度は飲物の氷解進行度が気になっちゃって気になっちゃって映画に集中できないのである。玄人はそこのバランスを体得しているので問題ないが初心者は無難に烏龍茶であろう。

ついでに食物だが、間違ってもイチゴミルクかき氷やピリ辛ホットドッグなどという大して美味くもないくせに手を出したくなるおどけた存在に踊らされてはならない。

私は問う。

映画に集中できますか？
――（目を閉じ首を振って）できません。いりません。
最後に最も重要なことを話しておく。このような幾分情熱的すぎる映画好きが諸君の側にいるかもしれない。一緒に映画を見ようと誘われるかもしれないが非常に面倒臭いので断るのがベストである。それが一番大事。
全く本筋が進まないので話をN氏に戻そう。
彼は開始後三十分で烏龍茶を飲み干しトイレに立ったまま、もう長いこと帰ってこない。そういえば彼は上映前に用を足していなかった。思えばトイレに行くタイミングというのも複雑な問題で以下略。
心配になってきた。彼は霊媒体質のせいで何かとよからぬ出来事に巻き込まれやすいのである。今頃どこぞで倒れて名状しがたい邪神に足を掴まれているかもしれない。或は体を操られて便器を舐めさせられているかもしれない。
――不安だ。
「と思ったけど映画が気になるからまあいいよね☆　日本の便器って人間の手より清潔らしいしね☆」
「上映中の私語は作品への冒涜だ。くたばれ」
N氏が小声で呟きながら帰ってきた。私は頷き、上映終了後に明るくなってからようやく口を開く。
「どうしたんだい。トイレで襲われたの？」
「アッー！　いや、お茶飲んで腹ん中がパンパンだぜって状態になったんで行ったらトイレが混んでてよ。それがおかしいんだ。皆トイレを譲り合って混んでんだよ。『お先どうぞ』『いえいえあなたこそどうぞ』ってな。そんなの関係なく小便しようとしたら、なんか鼻で笑われてよ。『空気読め』とか、しまいには『負け犬が！』とまで言われたら出るに出れないし、よくわからんがカチンときたから最後の一人になるまで我慢してやったぜ」
勝ち誇った顔で言うN氏。それは最後の一人になるまで出なかっ

たのではなく出られなかったのだ、きっと。霊的な何かが原因で。
「それはもしかして今あそこで譲り合ってるのと関係あるのかな」
観客は出口付近で固まり、譲り合って押し合いへしあいしている。かのリア充達でさえ謙虚な振る舞いをしていて、より世間的に好印象である。ああ大っ嫌いだあんな奴ら。
「……みたいだな。今度は先に出るぞ」
私はN氏について近くへ行く。誰しも譲ってくれているというのに誰も先へ行こうとしない様子は何やら日本の縮図のようである。
「先にどうぞどうぞ、私は妻が出産らしいですがあなたも大変でしょうから」
「いえいえ、俺なんて子供が車に轢かれて今危篤だって程度ですからあなたがどうぞ」
逆自慢大会が起きている……というかチキンレースである。
N氏が無言で人混みを掻き分けて進んでいく。その手が出入口の扉に触れた時、私はリア充の一人に腕を掴まれた。
「あんたはどんな理由で急いでるんですか。よほど急いでるんでしょうねー」
男は後ろ髪を何度もかきあげながら尋ねる。私は父親が死にかけて、と半ば期待のこもった嘘を吐こうとしたがN氏が代わりに口を開いた。
「お前、特に何もないよな？　強いて言えばあれか、借りてたDVDを返さなきゃとかそのくらいだろ」
――えっ。

周囲に罵られ軽蔑され、私は先程の席に戻って落ち込む。くすん。
「あと少しだったなー」
N氏が残念そうに言った。
「うん。どっかのバカ野郎が変なこと言わな……何か変な臭いがする」
自分のジャケットを嗅いでみたり鞄を開けてみたりしてみるが、

臭いの元は特定できない。
「……屁？」
「いやいやいや、俺じゃねえよ。どんな臭いだよ……いや、うん」
香ばしいを通り越して焦げ臭いような。何だか煙たいような。視界にうっすら白く靄がかかっているような。
「火事だな……」
N氏がぼそりと呟いた。
「ああ……」
返事だけはしたが、正直どうすればいいのか見当もつかない。ここは小さな映画館でたった一つしか出入口はないのである。そこには未だに譲り合う人々がひしめいている。火事に気づいてもなお脱出しないのはチキンレースが加速しているからか。
「N氏、今のうちに言っておくけどね」
心なしか暑くなってきた。N氏の顔も汗ばんできている。
「何だ、俺が好きってことか。ウホッ。それなら丁重にお断り――」
「ここの映画館はトークショーに使われることがあるんだ。舞台の上は通常より広いし、その裏には多分関係者が使う出入口があるんじゃないかと思うんだ」
彼はしばし腕を組んで考えた後、私を見た。
カーテンやピアノなどの用具置場となったそこには、案の定、扉があった。やけに重たそうで金属製の取っ手がついている。
「N氏、ちょっと開けてみて」
素直に開けるN氏。
「ギャアアアース！！」
怪獣のような悲鳴を上げた。やはり金属製の取っ手は熱々になっていたようだ。私は傍にあった雑巾越しに開ける。視界一面が赤とオレンジ色の世界。一気に体感温度が上昇した。体の前面が熱くなり、物の輪郭が揺らめいている。
リノリウムの床が続く先に、ドアが二つ見えた。小さな映画館だ、おそらくあのどちらかが出口だろう。

「どうやらここは廊下らしいよ。出口はもうすぐみたいだ。N氏、さあ行くよ」
振り返ると、N氏はまだ右手を抱えてのたうちまわっていた。
「ホラ早く早く」
雑巾で手を包んでやる。
「お前……いくらなんでも今回は殺意を覚えたぞ」
我々は走り出した。ジャケットに火がついたので脱いで放り出し、二つのドアの前に立った。
「どっちが正解だと思う。多分間違えるとアレだ……バックドラフトが起きるよ。話の展開からしてそんな気がする」
「バックドラフト？　ああ、ドラフト会議で裏取引するとかいう――」
突然N氏の尻に火がついた。比喩的な意味ではなく物理的に。火事ナイスツッコミである。彼はチェックのシャツにパンツ一丁となった。
「さて……ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な・て・ん・の――」
「早くしないと俺のすね毛がチリチリになるんだが」
「元からチリチリだろ。どっち開けたい？」
N氏が無言で右のドアを指す。
「俺の本能がそう言ってる。それでよ、バックドラフトって何だよ」
「じゃあこっちだね。バックドラフトっていうのは……ググれカス！」
私は方向音痴な彼とは逆に左のドアを開けた。そこは普段は閉鎖され使われていない部屋だったが、窓から侵入していた消防隊員と鉢合わせたおかげで助け出された。
「助かった……！」
まず私、そしてN氏が外に出る。野次馬の群れが我々を見て写メを撮っていた。パンツ一丁の彼と映画館の表にまわってみると、先程揉めていた人々が全員そこにいた。我々よりもかなり早く外に出られたようである。

「何でだ……骨折り損のくたびれ儲けかよ」
N氏は口を尖らせ、納得いっていない様子である。
「私はわかるよ。どうしてN氏が最後に助け出されることになったかね。これは多分、呪いだ。さっきのトイレを思い出して」
「ああ……出れなかったな」
頷く。
「つまり……そういうことだよ」
「つまり……どういうことだってばよ」
消防隊員から貰った毛布に包まって話す。
「これは蠱毒なんだよ」

さて怖いと思えば何だって怖い。ジャンプ漫画で出てきたくらいなんだし今更蠱毒ネタも手垢に塗れてどうかと思うが今回は蠱毒である。
それは古代中国でよく行われていた呪法であり、「なんだかおそろしげな虫（古代では地を這うもの全般を指す）を三日～七晩ほど壷などに閉じ込めバトルロイヤル戦をさせ、最後に生き残り出てきた一匹を使った呪い」というものである。生き残った蠍だか百足だか蛇だかはすり潰して毒にするか、魂だけを使って呪うか、はたまた使役するかは人によりけりである。
「要するに今回はそれを人間でやってるんだよ。トイレ、映画館とね」
と気づけばもうそこにはいない。聞けよ。
燃え盛る映画館から最後に脱出したN氏は今、MVPを取った後のヒーローインタビューのように記者達に聞かれまくっていた。ズボンも履いてないくせに。
「見たところ怪我は少ないようですが、一番酷い箇所はどちらでしょうか」
また愚かな質問をすることだよ。N氏も何か言ってやれ。
「右手ですね。取っ手が熱くて火傷しました。バカのせいで」

私をそんな目で見るな。そんな目で見られたら、欲情しちゃうじゃないか……。
ふざけていると、私は膝ほどの身長の女児にぶつかってしまった。見ると、ジーンズにソフトクリームがべっとりとくっついている。
「え、ちょ」
七歳くらいだろうか。ツインテールの女児はキョトンとした顔のままである。数秒間見つめ合うと、彼女は自分のソフトクリームの大半がなくなったことに気づいて泣きはじめた。どうすればいいのかわからぬ。傍に親はいない。
「ごめんごめん。君、お父さんかお母さんは？」
高いところから言ったのが怖かったのか更に泣き出した。慌ててしゃがんで目線を合わせる。
「お父さんかお母さんは？　おばさんとかおじいちゃんとか、誰かと一緒に来た？」
首を横に振った。
「お家がどこかわかる？　近く？」
首を縦に振った。それならまあいいか。
「名前は？」
「ふ……えぐっさくら」
さくら、ね。
「どうした」
N氏がやってきた。ロリ趣味のある彼にあまり関わらせたくはないが。
「この子はさくらちゃん。ぶつかってソフトクリーム落として、泣き出したんだ」
巧妙に私の不注意が原因だということを隠しておいた。
N氏が近寄ろうとするとさくらちゃんは少し引いた。彼の顔に若干哀しみがよぎった。
「そりゃあ残念だったなあ。よし、俺がアイス買ってやろう」
「いや～ごちになりますぅ」

N氏が私の頭をはたく。ずれた眼鏡をかけなおす。さくらちゃんはそれを見てけらけら笑った。
「じゃ、行くか」
彼女は、ぽてぽてぽと歩いてN氏と手を繋いだ。彼はこのうえなく幸せそうである。大丈夫だろうな、アイスで釣って誘拐したなんて言われないだろうな。
ついでに服も買えるように、近くのデパートに向かっていると、ふとさくらちゃんが立ち止まった。
「おにいさんたちは、つきあってるの？」
N氏の表情がにこやかなまま凍り付いた。そのまま釘でも打てそうなほどの急速冷凍である。
かわりに私が答える。
「いや、ただの知り合いだよ。知り合い以下かも」
「ほんにかいてあった。きちくめがねっていうんでしょ」
嗚呼嘆かわしいことよ、BLの魔の手がこんなところにも浸透していようとは。
「あの……そういうのはそうそういないし、いたとしても答えないと思うよ。性癖についていきなり聞くのは誰に対しても失礼だからね。あ、性癖っていうのは……」
「さくらしってる。まぞとかさどとか、ていねいごぜめがすきとかにゅうりんがおおきいほうがいいとかぜんりつせんぷれいがすきとか、そーいうことでしょ」
隣では可哀相にN氏が耳を塞いでガタガタ怯えている……！　おそらくこの少女にではない。こんな少女がいる世界にである。
「そ、そーいうコアなのじゃなくても、性別とかね。誰が好きとかはわざわざ話さなくてもいいことなんだよ」
テンションの上がったさくらちゃんは歯止めが効かない。
「どっちがせめ？　あなたがうけ？」
はてそういえば考えたことがない。私は鬼畜攻めか？　襲い受けか？　いや襲ったことはないが。何かしてN氏にツッコんでもらい

たがってる節もあるから誘い受けだろうか？　じゃあN氏は何だ？
ヘタレ攻めか？　面倒見のよいお母さん属性の受けか？
と悩んでいると視界に入ったN氏はもはや白い顔を一層青白くしてこの世を悲観している。
「何それ、お兄さんにはよくわかんないや」
ああ、子供の言うことに真面目に向かい合えない大人にだけはなるまいと誓った中学生の自分が泣いている……。こうして人は大人になってしまうのか。
さくらちゃんは口の端を歪ませて笑った。
「こんなこともわかんないの？」
イラッ。
「そうだ、さくらちゃん、プリキュア好き？」
「あんなこどもっぽいのみないよ～」
悪かったな、毎週欠かさずに見ているダメ人間で。こちとらキュアミューズの正体が誰かについて本気で悩んでんだよ。
「あ、でぱーとだよ！　あいすー！」
七歳女児が駆けていく。急に無邪気。これだからガキは嫌いなのである。私は座り込んだN氏を引きずり上げる。
「ホラ、アイス買ってやれよロリコン」
「いや、なんかあいつ違うじゃん……ロリとかそういうんじゃないじゃん……」
さくらちゃんは振り返り、入口でぴょんぴょん跳ねて叫ぶ。買い物カゴからネギを飛び出させたおばさんがクスクスと笑っていた。我々は一体どのような集団に見えるのだろう。
「はやくはやく、えぬしー！」
我々はデパートに入店し、アイスコーナーに直行した。ガリガリくんは溶けやすいのでおっぱいアイスを買った。N氏はホームランバーのバニラ。
「あたしこれとこれ」
さくらちゃんが手にもっていたのはレディボーデンとハーゲンダ

ッツである。我々二人が買った合計のおよそ八倍の価格である。
N氏はおもむろに全員のアイスを冷凍室に一先ず置かせると、畏まった態度になった。
「なー、さくらちゃんよ。お前さん、こんな話を知ってるか」
彼女は楽しそうに顔を向けた。
「あるところに普通の斧を使ってるきこりの男がいました。男はある日誤って湖に斧を落としました。途方に暮れていると湖の精が現れて、こう言いました。『あなたが落としたのは金の斧ですか、銀の斧ですか』。それに答えてきこりは『普通の斧でさ』と答えました。湖の精は『正直ですね』と言いました。きこりは自分の斧を返してもらって幸せだったとさ」
その話は、私の記憶では最後に全てもらえていたような気がするが。
「じゃあよー、これまでの話をふまえてこたえてくれ。さくらちゃんが落としたせいぜい二百円相当のアイスは、五百円もするレディボーデンチョコ味パイントサイズでしたか？　それとも三百円以上もするハーゲンダッツノーマルサイズリッチミルク味でしたか？　正直に答えてください」
N氏は順を追ってとつとつと話した。さくらちゃんは神妙な顔で頷いて聞いていたが、やがて口を開いた。
「さくらがおとしたのは、さんちちょくそうじゃーじーぎゅうにゅうでふらんすじんぱてぃしえがつくったせんごひゃくえんのそふとくりーむです」
負けたN氏は仕方なくレジに行って買ってやっていた。
そもそも私が買うのが筋だったような気がしなくもないが、黙っていた。そぞろ歩きながら出口に向かう。
「本当に食べ切れるのかお前？　食い切れなかったらわけてくれよな」
「やだ」
完全に幼女になめられているじゃないかN氏。と、急に彼は頭を

抱えて突然膝から崩れ落ちた。
「ちょっとお前、あれ見てくれよ」
視線の先には、デパートの出口が……あったはずだった。しかし現在それは人混みで見えない。また出られなくなっているのは明白である。
「それじゃ、行こうか、さくらちゃん」
私は彼女の腕をとり、N氏を置いていく。彼女は彼といたかったようで暴れるが、腕を持ち上げて口にアイスを放り込めば黙った。所詮子供である。
「え、おい」
N氏は捨てられた子犬のような目をしたが、生憎私は猫派であった。
「私とさくらちゃんなら出られる。出られる奴から出る。合理的だろう。あと、蠱毒野郎なんかと同じ場所にいられるか」
「お前それは死亡フラグだぞ」
返事はしない。私は誰とも目を合わせず話も効かず外に出る。私とさくらちゃんの前ではモーセのように簡単に人混みは割れ、扉は押せば開いた。
外は日差しが強いわりに、風は冷ややかであった。パトカーがサイレンを鳴らしながら無線で叫んでいた。
「この周辺地域で細菌が漏れた恐れがあります。住民の方は至急屋内へ避難してください。なお、名呑町から繋がる道路は全て封鎖されます」
やがて遠ざかっていき声もサイレンも止んだが、私の頭には網戸に張り付いた蝉の如くしつこく鳴りつづけていた。
細菌だと？
店内は人混みで締め切られて戻れない。罠だったのだ。
私は自販機脇のベンチにさくらちゃんを座らせた。それから周囲に目を走らせ、細菌以外におかしな奴や奇妙な現象が起きていないか確認……ＯＫ。

少し真面目な話をしなければならないのだ。
「さくらちゃん、しんがりはカッコイイと思うかい。あ、しんがりっていうのは」
「しってる。せんじょうでさいごまでのこりながらたたかうやくめでしょ。かっこいいと思うよ」
幼児性の皮を被った歩く知識庫。歪みを抱えた彼女は、しかし屈託なく笑うのだ。
「……さくらはかしこいな」
シャアの声真似をしてみる。
「こどもあつかいしないで」
さすがにこのネタは通じるわけがないか。
「じゃあ、君を大人扱いしよう。大人は責任をとる。君は、蠱毒の呪いをN氏にかけたことを謝らなければならない。そして呪いを解くんだ」
彼女は黙り込み、ため息を吐いた。脚を組んでベンチのひじ掛けに頬杖をつく。一瞬にしてその横顔だけがひどく大人びたものに変化する。
「どうして私がやったと」
「初歩的な問題だよ、ワトソン君。この話は推理モノではないから、容疑者らしい容疑者が他にいないのだよ」
さくらちゃんは呆れた様子で眉をひそめた。
「それ、書いてる貴方の責任で、私は何も悪くないじゃない。結果論だし」
「まあ他の根拠もあるさ。君と会ってからN氏が何をおいても君を最優先したことだ。違和感はデパートに入った時だった。上半身にはチェックのシャツ、下半身にパンツという状態で、衣料品売場を素通りしてアイス売場に直行するだろうかいいやそんなことはない反語。その後も君に説教し、膝から崩れ落ちる間ずっとパンツだった。まあ彼が天然を発揮してズボンを買い忘れてた可能性も考えられるわけだけれども、どちらにせよ面白いから黙ってたわけだけれ

ども」
　彼女はN氏をどうしたかったのか。私はそれが最も気にかかる。動機が不在だ。
「それに君は今日初めて会って名前も教えていないのに『N氏』って呼んでたね。カキョーインテンメイって奴だ。ありがちなミスだけれども」
　彼女は強がって私を睨む。少し興奮する。私はそれなりに彼女のことが好きなのだ。
「さっき貴方がそう呼んでたからよ」
「その言い逃れ方もありがちだ。だって私は君と会ってから意識的に彼を『N氏』とは一言も呼ばないようにしていたからね」
　さくらちゃんは黙る。沈黙は潮が満ちるようだ。気づけば膝の高さにまで波が押し寄せ、意思の疎通が難しくなる。
　負けないように声を出す。
「どうしてこんなことをしたんだい」
　彼女は肩をすくめ、諦めた様子で話し出した。
「貴方は『N氏とは何か』って考えたことある？」
「……ないけれども」
　さくらちゃんは額を押さえて、じゃあわからないでしょうねと態度で語った。蔑みの目。胃の裏あたりに快感がヌルリと首をもたげる。
「N氏とは、歴史のターニングポイントにいつも現れる謎の存在。古くはピラミッド地下にヒエログリフで書かれていた『暗黒のファラオ』に確認され、近代では演説しているヒトラーの後ろに立っている顔色の悪い眼鏡の男。ヒトラーを操っていたと言われている。全く同じ容貌で文化大革命や９．１１のビル写真にも写っている。ソ連とも関わりがある。そしてその全てに言えるのは、N氏が登場した場所には奇妙で恐ろしいことが起きるということ」
　何それ。
「じゃあ君はそれを防ぐために蠱毒を？」

彼女は首を振った。
「私はN氏を信仰する者の一人。今日の放火も、細菌騒ぎも、呪いも全ては私達がやっていること。王の器の癖に、全く目覚める様子のない彼を王にするために。N氏が世界の王として君臨すれば、不幸を撒き散らし、外宇宙から神を呼ぶ。それはそれは楽しいことになるわ」
不幸を撒き散らす。とんでもないことだ。扇風機にうんこがぶつかるくらいとんでもない。自分で言った比喩ながら本当にとんでもない。
この女の子に言わせれば、N氏は王の器らしい。ううむ、ただの霊媒体質と思いきや何やら壮大な設定を抱えているとは、N氏あなどりがたし。
「それで何故蠱毒を……って、もしかして」
さくらちゃんは指を弾いた。耳が痛いほど大きな音だ。反射的に閉じてしまった目を開くと、彼女は右手を銃の形にして私を狙っていた。
「そう、王権神授説」
蠱毒の根底には、最後に残った者には何らかの力が宿るという考え方がある。
こういった「生き延びた者」に対する特別視というのは人類の皆さんで共通らしく、例えば西洋における王家の始まりなどもそうである。どうして王家は民の上でふんぞりかえって搾取して命令して良いのか？
それはまず幾度も戦争に勝って生き残った者は「すげえ、何かパワーがあるに違いねえぜ！」というわけで、その者は畏怖の目で見られるようになる。そこへとってつけたように宗教者が権力者に絡んで「神に選ばれたからです」と言う。
こうして王家は神の代行として民を統べる権利を得るというわけだ。これを「王権神授説」と言います。試験には……多分出ない。
「火事の映画館で、おかしな場所から最後に救出される。人々の注

目を集める。細菌が漏れた町で最後に脱出する。また注目を集める。核がメルトダウンして県全体が封鎖され、最後に脱出する。『N氏』は死ぬことがないから大丈夫」

あんなに死相が出ておるというのに、死なないと申すか。まあ、N氏は死ぬのだけれども。

視界の端にチラリと宇宙服じみた黄色い防護服を着た男達が入る。

「酷いことをする。N氏は君がわりかし好きなんだと思うよ。ロリまっしぐらペディグリーチャムミキサーだから」

防護服の男達は篭った声で私達に警告をする。はやく検査と消毒を受けて室内に入りなさい、と。

「でも君は許してもらえないだろうね。この町は――それなりに、彼の思い入れのある場所だから、細菌をばらまくなんてことをすれば当然だ」

私は、もう感染しているのだろう。防護服の男が腕を掴んで私と彼女をワゴン車へと連れていく。

細菌は彼女らがついた嘘かもしれないと淡い希望を抱いていたが、本当だったようだ。彼女はワクチンを打っているのか、それとも殉死する信者の満足か――勝ち誇ったように口を歪ませて笑った。

「今更何をしようともう遅い。貴方は死ぬ。床にこぼれたミルクは戻らない」

彼女は高笑いしてワゴンに乗る。

遅い？

何がどうなろうと何かをするのに遅いなんてことはないのだ。私を殺すなどというのはN氏を殺すよりも難しいのである。

何故なら、私は「生き残ってこの話を書いている」からだ。

肩を叩かれて暗闇の中で目が覚める。隣のN氏がぱくぱくと金魚のように口だけ動かして「寝るな」と言った。スクリーンには宇宙

艦で喧嘩する異星人が映っている。
話はまだ中盤のようだ。私はリア充どもが騒いでいるのを尻目にシアターを出る。トイレに行き、譲り合って混んでいるのを係員に注意して立ち去る。
映画館を出て周囲を探索し、裏口のゴミ捨て場で彼女を発見する。プラスチック容器から懸命にガソリンをぶちまけている。
「さくらちゃん」
彼女は一瞬硬直して容器を落とす。それはバウンドして彼女の体にかかった。
「誰？」
「N氏と一緒にいることが多いし、私のことくらいは調べてるよね」
彼女は苦笑いした。
「どうしてわかったの」
私は彼女と話をするつもりはない。いちいち説明するのは面倒なのである。
「書き手を敵に回しちゃ駄目だよ。N氏を巡る物語に、こんな悲惨な要素や壮大な設定や意味深な展開はいらないからね」
彼女は警戒した猫のように微動だにしない。西部劇の決闘のように乾いてヒリヒリする雰囲気。ないまぜになった恐怖や緊張が体から漏れ出すのを防いでいる。
「蠱毒の行き着く先って考えたことあるかしら」
私はおかしな奴らがいないか目を配る。
「県、国、大陸が封鎖されて脱出する。次は、重力によって人々が閉じ込められている巨大な蠱毒――この星だ。地球の人類は君達が起こした何かのせいで殺し合いでもして滅んで、最後にN氏を王として脱出させるんだろう。外宇宙の神を呼ぶのか」
言おうとしたことを先取りされ、彼女は口を閉じることができない。
「貴方は何者なの」
「私はN氏の語り手だよ」

さくらちゃんがとっさにとり出したライターを彼女の小さな手ごと包んで閉じる。火はまるでハサミで切断されるように消えた。
「無駄無駄無駄って奴だ。この設定はなかったことにする。もう一度つまんないことをするなら『潰す』よ」
彼女は泣きそうな顔になった。
「さあアイスでも食べよう。N氏におごってもらおうか」
やがてN氏は困惑した様子で映画館から出てきた。
「あんなに楽しみにしてたのによー、映画見ないでいいのか？　ん？　なんかあったか」
「いや、別におかしなことは何も起きなかったよ」
さくらちゃんを紹介する。N氏は嬉しそうに眺めていたが、やがてはたと我に返った。彼女にことわりを入れ、壁の近くで私に釘をさす。
「お前、面白くしようとか考えて変に捻り過ぎるから、余計な設定は絶対に付け加えるなよ……」
よく意味がわからないが、それは彼女に言ってもらいたい。もう少しで妙な設定を加えられるところだったのである。これからの話の展開もN氏を巡る大スペクタクルになるところだった。
「例えばどんな設定何さ？」
「あの子が実は男だった――とかだよ」
「ああ、そういうこと」
ふと足元を見るとさくらちゃんが我々の話を楽しそうに聞いていた。私は戯れに聞く。
「さくらちゃん、名前は？　フルネームで答えてあげて」
彼女は――というか彼はお辞儀をして元気よく答えるのである。
「佐倉です。佐倉朔太郎です。男の娘やってます」
「あ――……もう」
N氏が私の頭をはたいた。眼鏡が吹っ飛ぶ。慌てて拾いにいくと車にひかれかけた。
さくらちゃんが何を考えているかは知らないが、知り合いが一人

増えた。悪くないことである。

孤独の宇宙（後書き）

読んで頂きありがとうございます。宜しければ感想などお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3845m/

N氏

2011年5月28日08時25分発行